
アクレニア戦記

フリューナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクレニア戦記

【EZコード】

N2270V

【作者名】

フリューナ

【あらすじ】

複数の男女が織り成す、ファンタジー物
世界に生まれた二つの大国

その二国を覆う影に、少年少女たちは戦う
後改定します（多分）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

プロローグ

天空に輝く、二つの月。

北の空に輝く、淡い朱色の光を放つ月『エスカレルニア』。

南の空に輝く、濃い蒼色の光を放つ月『フォーゲルノート』。

手を伸ばしても届かない、そんな高みにある美しい二つの月に、人々は憧れた。

二つの月に対する信仰は、二国と呼ばれる大国を産み出した。

北の大陸に居を構える『エスカレルニア王国』。

南の大陸に居を構える『フォーゲルノート帝国』。

二国は独自の発展を遂げながらも、お互いを尊重し敬った。時折現れる、魔物からの恐怖を協力して打ち払い、手を取り合いながら生きていた。

一一国が建国されて百年。

月への信仰心は薄れてしまつたが、人々は穏やかに平和の時を過ごしていた。

だが、そんな平和にも影はあつた。

数年前、エスカレルニア王国の辺境の農村が魔物に襲われたのだ。その事件については、あまり珍しい事ではなかつた。魔物が村や町を襲う事など、一一国が建国される前から頻繁にあつたからだ。

そのため、その事件はすぐに風化し、人々の記憶から消えていった。

その他にも、そのような事件は多数報告されたが、王国騎士団や帝国騎士団により終結した。

その影で、暗く、深い闇の思惑が蠢く事も知らずに。

プロローグ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

求める者たち

ガヤガヤガヤ…

「」はエスカレルニア王国の首都クルメニア。

町の中心に城が建ち、町は城下町として賑わっている。そんな首都。

「ちょっと、力ナ！ 待つてってば…」

「待たない！ 早いとこお宝を鑑定してもらいくんだから…」

そんな町中に、一人の少年の悲鳴にも似た声と、一人の少女の急かす声が響いた。

少女を追いかける少年は、水色の髪を横に流し、少し自信の無さそうな目をしている。さながら美少年といった風貌で、腰についた手甲のような双爪を揺らして走っている。

少年を振り返る少女は、漆黒の髪を二つに纏め、快活そうな瞳を持ち、背には大きな槍を背負っていた。

「力ナ！ そんなに早く行く必要ないって！ … また売れないかもしないんだし」

「シオン！ 不吉な事言わないの！ それに、私の勘では絶対に値がつく！ シオンが見てもそう思うでしょ？」

「うーん… どうだろ？ 確かにあのユミルの遺跡から取つてき

た古文書だけじ、」の劣化は…」

シオンと呼ばれた少年は、顎に手を当てて真剣に悩み出す。

そんなシオンをカナと呼ばれた少女はただ、見つめる。信頼に満ち溢れた眼差しで。

「うん。僕としてはこの古文書は、売れても五百メルぐらいになればいいと思つ」

「えー！ あれだけ苦労したのに…？」

シオンの言葉に、落胆の表情を隠せないカナ。そのまま膝を降り、地面の石畳に手をついてしまつ。

だが、そんなカナにシオンはでもと言ひながら肩に手を置く。

「考古学調査をやつてる所とかだつたらいけるかもしれないよ？ まあ、あくまでも謝礼程度だから、あんまりもらえないと思つけど利きは外れた事無いし」

…

「謝礼程度か…。ま、落とし所ではあるわね。今までシオンの田利きは外れた事無いし」

手と服についた埃を払い、仕事の相棒への称賛を送る。

その称賛に、シオンは照れた笑みを浮かべ、頬を搔いていた。

「…それを言つならカナもだよ。なにも考えてないようなのに、急にお宝を持って帰つてくるんだから」

「…それって貶してるのが褒めてるのか分からぬわよ」

「褒めてる褒めてる」

「そう。それならいいけど」

「ま、取りあえず鑑定所に行こうよ。こんな所で悩んでても分からないものは分からぬんだから」

「そうね。それなら行きましょ？」

二人は笑いあって、目的の場所へと歩き出した。

「ん？ ねえ力ナ、なんかあつちが騒がしいんだけど…」

「え？ 本當だ。大方大道芸人でもいるんだろうけど、あの人だかりはちょっと多いわね」

目的地に向かつて歩いていると、道の端に結構な数の人だかりが出来ているのをシオンが見つける。

いくら首都と言つても、これだけの人が集まるのは珍しい。力ナの言つ通り、大道芸人やその他の人の注目を集めることをしているのだろうが、魔法の在るこの世界ではあまりその職業に対する客受けは良くない。

なぜなら、一言で言えば見慣れてしまつてゐるからだ。魔法と言つ万物の法則の象徴があるのに、手品と言つものでは少々物足りないと誰もが感じてしまう。

「ちょっと行つてみない？ なんか興味がわいた」

「いいわよ？ でも、そんなに面白いものが見れるとは思わないけど…」

シオンの提案に、力ナは疑問を持ちながらだが同意し、シオンについていく。

人だからに向かつて歩いていると、その中心から冷たい言葉が聞こえてきた。

「…いい加減にして。見世物じゃないの」

言葉に乗つた鋭利な刃が集団に突き刺さる。

その言葉によつてこじ開けられた集団の中から、一人の少女が現れる。

髪の色は薄い金色。髪を力ナと同じように一つに纏めているが、その長さは少女のほうが長い。軽蔑するような視線を集団に向け、堂々とした態度で歩いている。

「…ねえ、あれって…」

「うん。召喚魔だね。…じゃあ、あの子は魔導召喚師かな？　あ、指輪もついてるね」

力ナの投げかけた質問に、シオンが冷静に答える。

シオンが言つた召喚魔とは、少女の肩の上辺りに浮かぶ服を着た丸い鳥の事だ。

この鳥の名前は、スーザード。魔物の中でも比較的弱く、滅多に人を襲う事はない。そのため、その愛くるしい形は癒しの対象としてペットにされている。

だが、魔物を使役、捕まえる事が出来るのは魔導召喚師だけなので、その道に進む者にとつては格好の路銀稼ぎの対象となつてしまつているのが現状だ。

「…全く。いつもの事だけど、鬱陶しいつたらありやしないわね」

輪の中から完全に抜け出した少女は、ため息を吐きながら悪態をつく。

そして、右手の中指にはめた指輪を光らせ、スーザードを下がらせる。

「はあ…。すごいなあの人。無詠唱で召喚魔を戻したよ」

「そうね…。確かに、どこかである子を見聞きした事があるはずなん

だけど……」

単純に少女の技に感嘆するシオンに対し、頭に引っ掛けた名前をひねり出そうと、思案していた。

そんな二人をよそに、少女はすたすたと歩いていく。とは言つても、少女の目には一人の姿など一度たりとも入つていないので、

「あ、と言つた鑑定！ 危うく忘れる所だつたじやない！」

「へ？ 僕が悪いの？」

「シオンが見に行こうなんて言つからでしょー？ ほら、早く行くよー！」

「痛つ！ 痛いから！ 耳を引っ張るのは止めてー！」

その場所にいた人間は、先程の少女の事など、すぐに忘れただろう。

耳をエルフより長く引っ張られたまま引きずられる少年の異常さに。

求める者たち（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

拒絶する者

「…………」

カツカツカツ…

薄暗い路地に、先程の少女の足音が響く。

その威風堂々とした佇まいは、思わず道を開けてしまいそうな雰囲気を纏っていた。

「…」

路地を数回曲がった先で、少女が足を止める。

そこには寂れた扉が音を鳴らしながら揺れ、いかにも廃墟と言う雰囲気を醸し出した酒場だった。

周囲に人の気配もなく、スラムよりひどい臭いのする場所に少女が立ち寄った理由はただ一つ。仕事である。

ギギイ…

今すぐにでも壊れそうな扉を押し、中へと入り込む少女。すると、先程までは感じられなかつた気配が、敵意が少女を襲つた。

「…ふーん。たまにはあいつも役に立つのね。情報通りじゃない」

不適な笑みを浮かべ、敵意の感じる方向に背におつた杖を構える。

「グルルル…」

杖を構えた方向から、一匹のクローウルフが唸り声を出しながら現れた。

その体躯は人より少し小さいが、足の爪が鋭利に発達しているため、歩く度にカチカチと音を鳴らしながら歩いている。

「首都にウルフが入り込んで巣を作っている、か。最初はなんてでたらめと思つたけど…」

警戒しきつた様子のクローウルフを睨みながら、少女は構えた杖を閃かせる。

次の瞬間、杖についた宝玉が光り、無詠唱で魔法が発動する。

「ガウツ！？」

困惑の声を上げ、周囲を見渡すウルフ。

それもそうだろう。宝玉が瞬いた瞬間、この寂れた酒場が一瞬で氷に包まれたのだから。

「フフ…。さて、あなたはどんな声で鳴いてくれるのかしら？」

恍惚の表情を浮かべ、氷の世界に立つ少女は、さながら氷の女王だつた。誰もが畏怖し、頭を垂れる。そんな空気が、場を支配していた。

「…ガアツ！」

ウルフは恐怖の対象を目にし、氷の冷たさではなく野生の本能から震えていた。だが、震えを押さえ込み自慢の足の爪で氷の床をしつかりと掴んで、少女へと飛びかかる。

それを見た少女は、喜色の笑みを浮かべながら呪文の詠唱を始める。

「凍てつく世界よ。我に歯向かう愚かな煩愚に、氷の誓約を！　『氷の監獄』！」

ズズン…！

「キャン…！」

ウルフの爪が少女に届こうと言つ時、ウルフの頭上から氷の塊アイシクルブリスンが降つてきた。その塊はウルフを閉じ込め、外へと出られないように閉じ込める。

「…」はあたしが作った、あたしだけの氷の空間。あなたはもう負けてるのよ。…私に会つた時から

閉じ込めたウルフの元へと歩みより、杖でウルフをつつく少女。

「ま、使役してあげても良いんだけど、あいにく間に合つてるのよね」

右手の指輪を閃かせ、その存在を誇示するように見せつける。

そして、それからは杖でつづいたり檻を縮めたりしてウルフの反応

を楽しんでいた少女だったが、あまり反応が変わらなことになってしまったのが気に入らなかつたのか、突然無表情になる。

「…もう、いつか。ま、恨むなら運命を恨みなさい。私に出会つたのが運のつまだつて」

捨て台詞のみひびくと、ゆっくりと左手を掲げる少女。

「最後ぐらこは楽に逝かせてあげる。ここに止付けも含めて、ね」

掲げた左手を、ゆっくりと握り込みながら呪文を唱える。指を一本づつ、ゆっくりと折り込みながら。

「深淵の闇に光る、一塊の氷塊よ。その身に閉じ込めた者の魂と共に弾けよ！　『氷の壊^{アイスブレイク}』！」

手を完全に握り混んだ瞬間、少女によつて作られた空間が崩れ去る。凍りついた壁と天井は剥がれ落ち、床には大きな亀裂が起つて、氷の世界が破壊される。

そして、氷の檻に閉じ込められていたウルフは、檻が一気に収縮した事により、氷に閉じ込められ、氷と共に弾けた。

絶対零度で弾け去つた肉は、血を流す事も許されずに流れしていく。

その様子を、少女は冷めた目で眺めていた。

「…戻りましょうか。こんな辛氣臭い所、仕事じゃなかつたら絶対に来ないわよ」

最後にそう言い残すと、少女は踵を返して去つていった。

「ちょっとあんた、珍しく正しい情報寄越したと思つたら、なに？
あれは？」

「な、なんの事かな？」

ウルフ狩りを終えた少女が向かつたのは、情報屋を生業としている男の店だった。

そして今、テーブルを挟んで少女が腕を組んで「」んでいる。そんな少女の態度を見て、男は視線を迷わせている。

「あんなクソ汚い所だなんて聞いてないんだけど？　それに討伐対象がクローウルフ一体つて……あたしを試してみの？」

「い、いや、そんなつもりはないよ？　い、いやだなー、コフュル二カさん」

男が少女の名前である「ひな」を呼んだ瞬間、世界が文字通り凍りつく。

「…あたしの名前を、あたしの許可なく口に出すなって、前にも言わなかつた…？」

小さい店に吹きすたぶ氷嵐に、男はただ怯える事しかできない。

「…仕事上、名前は教えてあげたけれど、あたしはあたしの気に入つた奴にしか名前を呼ばせない。…特にあんたみたいなのには絶対に呼ばれたくないの」

「…す、すいません…」

氷点下をさらに下回る冷酷な眼差しに、男はただ萎縮し謝る事しかできない。

そんな男に、小さいが綺麗な指を向け、その指の先に紫電を纏わせる。バチバチと音を鳴らしながら近づく指先に、男の恐怖は最高点を越えた。

「…なに？ 漏らしたの？ だらしないわね」

男が恐怖のあまり失禁した事に、ゴフュルニカは呆れてしまう。

「これからもーっと面白い事して上げようと思つたのに

唇をつり上げながら笑うゴフュルニカに、男はただひきつた顔をするしかなかつた。

ユフェルニに見える、悪魔の羽と尻尾を幻影だと思い込むために。

拒絶する者（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

兄妹のあり方

「はあっー。」

ブンッ

広い部屋に、少女の凛とした声が響く。

何も調度品の無い、あると言えば窓だけと言つ真つ白な部屋で、少女は一心不乱に剣を振つていた。

剣を振るつ度に揺れる、白銀の髪。真剣さがつかがえる青い瞳。そのどれもが美しく、輝きを放つていた。

そんな少女に、一人の青年が声をかけた。

「やあ、リイナ。今日も頑張つていいようで何よりだね」

「レイソル兄様！」

リイナと呼ばれた少女は、兄と呼んだ青年に飛び付く。汗だくだと言つのにレイソルは全く気にせず、飛び付いてきた自分の妹を抱き締める。

「おじおじ。いつも言つてるだろ？ 急に抱きついてきたら危ないつて」

「『』めんなさい、兄様。でも、兄様を見たら、つい」

「まあ、いいんだけどね。…それはそうとリイナ。久しぶりに、どうだい？」

レイソルは転がっていた長剣を手に取ると、リイナと同じ白銀の髪を揺らしながら構える。その青い瞳は、挑戦的なものを浮かべていた。

「兄様…！　はい！　喜んでお受けさせます！」

兄の提案に、花の咲いたような笑みを浮かべると、リイナは剣を構える。

リイナは剣を中段にしつかりと構える、ハーキュリー流の基本的な構え方をとり、レイソルは長剣を右手だけで持つて体を開く、片手用の防御の構えをとつた。

二人ともハーキュリー家の嫡子であるため、お互いの構えの弱点、つまりハーキュリー流を熟知している。

リイナの構えは、基本であるがゆえに読まれやすく、決め手に欠ける。レイソルの構えは、防御し受け流すための構え方で、基本的に攻撃はできない。

だが、そんな事を気にするような一人ではない。ハーキュリー流の真髓は、構えを、『型』を頻繁に入れ換える事だからだ。

その証拠に

「やつ…！」

「ふつ！」

二人の型は全く違うものになっていた。

リイナの型は、剣を横に寝かせて脇に構えた早さを重視する型になり、レイソルの構えは剣を右手に持ったままだが、体の開きが逆になつて剣を後ろ側に引いて構えていた。

ガギンツ！

「キヤツ！」

数合打ち合つた後、耳障りな剣の擦れる音と、リイナの小さい悲鳴が重なる。剣を弾き飛ばされ、尻餅をついたリイナの首筋に、レイソルの剣が突きつけられた。

「これで勝ち、だね。リイナ？」

「…負けました…。やっぱり兄様は強いです」

「ははは。リイナも十分強いさ。奥の手を出されてたら、やられていたかもしれないよ」

レイソルは笑いながら、落ち込む妹の頭を撫でる。

その手の感触に、最初は陶酔していたリイナだったが、すぐさま我に返つて兄の手を振りほどく。

「いやです！ 剣と剣の、一対一の勝負に魔法は無糸です！」

「…やつ言つてもいいんだと助かるよ。俺には魔法は使えないからさ」

「あ、やつ言つ意味で言つた訳では…」

少しだけ遠い田をしながら言葉を発した兄に、リイナは慌てながら弁解する。

だが、兄はそんな事を気にせずに笑みを浮かべ、リイナの頭をクシヤクシヤと撫でる。

「俺もそんな意味で言つた訳じゃないよ。リイナが気にする事じゃないさ」

「兄様…」

「や。そんな事は忘れて、鍛練しようか！ まだまだ強くならないといけないからなー！」

「ええ！？ 兄様、まだ強くなるんですか！？」

楽しそうに笑つて剣を握り直す兄に、妹は呆れながら突つ込んだ。

兄妹のあり方（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

「寄つて、見てつて、買ってつてー。破格の値段で新登場だよー」

首都クルメニアにある露店街。熾烈な顧客取りの行われるこの一角で、集客の声が響く。

その声の主は、ピクピクと動く猫耳が愛らしい、獣人族の少女である。

石畳の上に、乾燥した草で編まれた絨毯を敷き、その上に商品が並べられてある。その商品は、全体的にサイズが小さく、人の手で十分握り込む事のできる色とりどりの球体だった。

「飴ー、飴はいかがですかー。体力、魔力、気力回復に便利な飴も置いてますよー。是非見てつてくださいー」

その球体の正体は、なんと飴だった。それによく見ると、小さいが看板が立つており、その看板には『飴、売つてます。冒険者、トレジャーハンターの方はぜひ!』と言う文字が書きなぐられていた。

だが、少女が呼べども人は見向きもしてくれない。理由は単純、安価で扱いやすいのは確かなのだが、回復量が多くないのだ。

いくら安くても、吸収率の悪い薬より、吸収率のいい薬を選ぶだろう。その証拠に、飲み干す事で効果を発揮するポーションの方が圧倒的に人気がある。

さすがに、死すらも超越すると言われるエリクサーには及ばない速

効性だが、それでも飴よりは効くのだ。

「うーん…。ゼンツゼン売れないニヤー。やつぱり、飴は止めてもふもふした装身具の方が…」

少女が、真剣に店の方向転換を考えていると、二人の男女の声が聞こえてきた。

「あ。カナ、あそこに戻つてゐよ?」

「ほんと、シオン? ビリビリヘ?」

「あそこ。獣人族の子が店番してゐる」

「あ、ほんとだ。じゃ、あそこにしてよ!」

「いや? お客様ですか?」

「うん。ここでは、飴を戻つてゐるんだよね?」

店の方向転換を考えていた少女だったが、思わず来客に心を踊らせる。シオンが少女に店の内容について訪ねると、上機嫌で答えた。

「そうですよ。体力、魔力、気力回復に便利な飴も置いてますニヤ

」

「へー。…連れのカナが飴好きでさ。回復系だつたらポーションで十分なんだけど、カナはあの染み渡る感じがいいつて聞かなくて」

「いいじやないの別に。回復だつたらシオンでも十分なんだし」

「十分つて…。ま、いいけど。それで店主さん。値段の方はどうなの？」

「えっと、基本的に一個十メル以下で売つて…」

「えー？ 十メル以下！？」

少女が値段の説明を始めた時、十メル以下という破格の安さに、力ナが身を乗り出す。

「ニヤニヤー？」

「いひ、力ナ。店主さん驚いてるだろ？」

「でも！ 十メル以下だよ！？ 普通のお店の半分以下だよ！？」

「だから動くなつて。槍が、槍があたるから」

軽く暴れる力ナをシオンが制する。軽く肩を掴んで制するだけなので、槍が動くのを止められていなかつた。

「いめんね、店主さん。もう少しで治まるから…」

「…人を猛獸みたいに言つくな！」

シオンが申し訳なさそうに謝ると、力ナの一撃がシオンの頬に突き刺さる。そんな様子を店主である少女は笑つて眺めていた。

「ほんとじめんね？ 店主さん」

カナに殴られた頬を押さえながら、シオンは頭を下げる。

「うわっ、別にいいですニヤ。それに、クーの事はクーでいいですよ？」

「いいの？ ジャア、クーさんで」

「あ、さんもつけなくともいいです。クー達獣人族はさんとかつけないですから」

「あー、それもそうね。基本的に名前しかないから、呼び捨てか他の呼称だったわね」

「へー、そりなんだ。じゃあ僕らも名乗らないとね。僕はシオン。シオン・セナ。よろしく、クー」

「私はカナ・ゴルセルニアよ。でも、ほんとに十メル以下の？ だったら蠍原にさせて貰いたいんだけど…。と言つか、一緒に来ない？ 専属の飴職人とかで」

自己紹介の最中、カナがそんな爆弾発言を投下する。

「ちょっとカナ。それはあんまりだと思つよ…」

「えー、だつてわざわざ都まで帰つてしなきやならないのよ。.
だつたら一緒に旅した方が都合がいいじゃない」

「それせやうだらうやうだい、相手の都合とか色々……」

「いこですか?..」

「はい?..」

「ほんとー? やつたー!」

カナの発言をシオンが否定しようとすると、その当事者であるクーがあつやつと認めてしまつた。

重要な事をあつさつと決めてしまつたクーに、シオンは耳を疑う。話を持ちかけたカナはあまり氣にせず、喜びのあまりクーに抱きついていた。

「ううやあー」

「やつたね! じゃあ、クーちゃん。これからよろしくね?..」

「よ、よろしく、どういや」

抱きついて頬擦つまでしていくカナに、クーは困惑しながらも口流の挨拶をのべた。

「でも、ほんとによかったの？」

未だに抱きついて頬擦りを止めなかつた力ナを、シオンが殴つて沈めた所で、クーへと問い合わせるシオン。

「んー、そりそりお店置んじゃおうか悩んでたから、いいきつかけになつたよ。…それこ…」

チラチラ…

「ん？ どうしたの？ クー」

シオンが話しかけた辺りから 実際はもつと前からなのだが
視線がチラチラとあるものに動くクー。

その視線の先が気になり、シオンもそのあるものに目を移すと、力ナの槍が目に入った。

「… || ャア」

蕩けるような声を出し、顔をだらしなく歪ませるクー。

そんなクーにシオンは苦笑しながらも、カナの槍『レストランショーン』の石尻の部分を向ける。

「はー。お皿這はこれ？」

力ナお気に入りの狐の尻尾をモチーフとしたファーを。

「…ふわふわニヤー。もーもーニヤー…」

緩みきつた笑顔で、ファーを摘まんだり握つたり擦つたりするクー。その周りには、お花畠にも似たようなものが舞つていた。

「…ん、う…」

そんな幸せそうなクーをシオンが眺めていると、力ナが殴られた頭を押さえながら起き上がつてきた。

「シーオーンー？ なにもあんなに強く殴る必要ないよねー？」

恨めしい声を上げながらシオンへと迫る力ナ。

力ナの後ろに見える修羅を確認したシオンは、両手を精一杯掲げて降参の意を表す。

「悪かつた。僕が悪かつたから！」

「つたぐ…。あれ？ 槍は？」

息を吐きながら落ち着くと、ようやく背中の違和感に気がつく。

「あ、レストーションならあるぞここにあるよ

「何あんな所に移動して……シオン。あれはなに？」

「ふにゃー…」

カナが指差した場所には、地面に「ぐるぐる」と転がりながらフターに抱きつくクーの姿があった。

「見たままだけど？ よかつたじやない。仲間ができるぞ」

「いやいやいや。わすがに私はあそこまでじやないはず……」

「いいじやん、認めひやえば。実際その通りなんだから」

「……どこの口がいうか、どこの口が……」

またもカナの逆鱗に触れたシオンは、その頬を盛大に引っ張られていた。

新しい仲間（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

兄妹の別れ 少女の旅立ち

「はあ……はあ……はあ……」

「……うん。動きの無駄もなくなってきたし、何より剣に重みがある。
……強くなつたね、リイナ」

鍛練場での小休止。

肩で息をするリイナに対し、レイソルは汗はかいているが涼しい顔
で妹の成長を喜ぶ。

そんな兄は、一息つくと練習用の剣を壁に置き、リイナに手をさし
のべる。

「はえ？」

「(ノ)飯食べに行こうか。お腹、空いてるだろ?」

「は、はい! 行きましょう兄様!」

笑顔と共に差し出された手を、リイナは強く握りしめた。

モグモグモグ…

「… そう言えればリイナ。俺はこれからしばらく家を空けるんだけど、リイナはどうする？」

ハーキュリー家の食堂の中、食事中にレイソルがそう切り出した。

「え？ 兄様、どちらに行かれるんですか？」

「ちょっと帝国にな。時期的なものもあるが、大半は噂のせいだ。これを期に帝国との関係を密にする狙いがある」

リイナの疑問に、いままでの優しい顔ではなく、王国騎士団団長としての顔で答えるレイソル。

空氣の変わった兄に、リイナは佇まいを急いで直す。そのせいで、食べていたものが喉に詰まり噎せてしまつ。

「んぐ… …」
「んぐ… 」

「おーおー。大丈夫か？ リイナ」

「は、はい。大丈夫です。すいません」

「で、だ。俺は帝国に定期連絡と先触れとして赴くから、明日にでもこの家を出る。それをリイナに伝えたかったんだ」

「やつ… ですか」

一月に一度程度行われる、王国と帝国の騎士団会議は、回を重ねるほどに会場の場所が変わる。そのため、どの国の領土で行つかは分かつても、帰つてくる日数は分からぬのだ。

一度、二ヶ月も兄が帰つてこなかつたこともあり、リイナとしては面白くない報告だつた。

「でき、俺の知り合いで面白い人がいるんだが、会つてみないか？もちろん連絡はこちらでするよ」

少し落ち込んでいるリイナに、レイソルが楽しそうに笑いながらリイナに問いかける。

「面白い人…ですか？」

「そう。魔導召喚師で、凄腕の人なんだ。ユフェルニア・シーファスつて言つたら聞いた事あるだろ？」

「ここエスカレルニア王国で、もつとも強く、もつとも気難しいと言われている人物だ。」

気にくわない者には、名前すら教えず無視し、もしも名前を呼ぼうものなら、氷魔法で氷付けにされると言われている人物である。

「知つてますけど…。…その人が会つてみるかどうかって人ですか？」

「その通りだよ。確かに気難しい人かもしれないけど、話してみるといい人だよ？」

「へー。って言うか、何でそんな人が兄さんの知り合いなんですか？」

「ん？ ああ、前に騎士団での訓練中の救命救護を手伝つてもらつたんだ。その時にね」

騎士団といつても魔法を使える者はたくさんいる。その者達のみを集め、集団で訓練を行つていた時に事件は起きた。

一人の団員が魔法を暴発させたのだ。

暴発させたのは炎の魔法で、暴発によつて荒れ狂う炎が団員を焼こうと言う時に、突然その炎が凍つた。

燃え続けたまま凍りつく炎に、誰もが呆けていた頃、一匹の召喚魔が現れた。人魂のように燃える体の中心に、睨む猫の顔が見える『フレムニユート』と言う名の魔物が、ふわふわと訓練場を漂つ。

「キューーー？」

愛らしい声を上げると、フレムニユートは召喚魔特有の光を放ちながらかき消える。

そして、その魔物が消え去つた後に彼女は現れた。

「怒られたよ。それはもうすごい勢いでね。『あんたたちねえ！ 魔法の訓練するんだつたら、熟練者の立会いの元やりなさいよ！ 監督者が魔法の素養が無い者つて、ありえないわよー！』ってさ

「うわあ……。なんだかすごく想像できます……」

「でね？ 後日礼をつて言つたらいらぬって言われてさ。その時はそれが当然かなー、って思つたんだけビックリな事を言い出してね？」

「ビックリな事、ですか？」

「うん。『あんたが面白いと思つ奴を連れてきなさい。あたしのいい暇つぶしになるようなね』って言つてくれたよ。彼女は」

「うわー、なかなか面白い事を言いますね…。って、そんな人の所に私を紹介するんですか！？」

それまで兄の話を感心しながら聞いていたリイナは、ようやく話に追いついてテーブルから身を乗り出す。

「そうだよ？ だつて、こっちの騎士団から何人か送つたんだけど、面白くないの一言で送り返されてね。こっちとしては結構困つてたんだ。それに、リイナにもそろそろ旅でもして外の世界を見てもらいたいって言つ、父上や母上のお達しだからね」

さらつと重大な報告もかますレイソル。特に何の問題もないようだ聞こえるが、可愛い愛娘に対して旅に出ると言つ親も親である。

「えー、父様も母様も簡単に言つてくれますね…」

「大丈夫なはずだよ？ それに、巷では一人組みの男女のトレジャーハンターが名を上げていると言つ噂もある。その人達に協力を仰いでも良いと思つよ」

「トレジャーハンターですか…。はあ…分かりました。このリイナ・ハーキュリー、その魔導召喚師のもとに向かいます」

「そう言つてくれると思つてたよ。…」んな事を妹に頼むのは変かもしぬないけど……聞いてくれるかい？」

終始笑つていたレイソルが、急に真面目な顔になつて妹に語りかける。

「はい、なんですか？ 兄様？」

「さつき少しだけ触れた話題だけど、リイナは噂を知つてるかい？」

「噂、ですか？ うーん…色々なものがたりすぎて、どれがどれだか…」

「あー、それはすまない。騎士団の皆にもよく言つておくよ。まあ、その中でもこの情報はあまり知られていないんだ」

首をかしげて思い返そうとするリイナに、レイソルは手をあげて謝罪する。だが、その真剣な眼差しはしつかりとリイナを捉えていた。

「（兄様の騎士団でのお顔…久しぶりに見ました…）あまり、と言う事は騎士団のみと言つ事ですか？」

「正確には違うが、そう受け取つても構わないよ。リイナもこの世界の歴史、月の信仰については知つてるだろ？」

「はい。朱の月エスカレルニア、蒼の月フォーゲルノート。この二つの月の信仰によつて二国ができたつて」

「そう。でも、その月に対する信仰は今となつては無いに等しい。その事を憂い、月の信仰を回復させようとする過激派がいるんだ。…リイナにはその調査を行つてほしい」

真剣な眼差しを緩め、最後はただ妹を心配する兄の目にこなつて見つめるレイソル。

「…分かりました。その任務、しかとお受けいたします！」

「頼むよ。王国、帝国ともに上の身分の人達にも過激派はたくさんいるんだ。…元々は別々の信仰を持つ同士、下手をすれば戦争にもなりかねないからね」

「戦争。その単語を聞いた時、人知れず体が震えるのをリイナは感じた。

人が人を殺す、憎しみと理解の浅さの結晶。それが戦争だと、教えられてきた。人の心を蝕み、狂気に走らせるものだとも。

「そんな…」

「でもこれはあくまでも可能性の話だ。…絶対にそんな事はさせない。王国騎士団団長として誓つよ」

拳を握りしめ、決意の表情で語るレイソル。

「ああ、この話はくれぐれも内密にね。一般市民には絶対に聞かれないと云つて」

「はい。分かりました」

落ち込んだ表情のままだが、しつかりと返事を返した事にレイソルは満足し席をたつ。

「Jの場所に行くといい。彼女行き付けの酒場兼宿屋らしい。薄い金色の髪を一つに束ねた少女だから、すぐに見つかると思うよ」

部屋を出る間際、レイソルはリイナの前に一枚の紙を置く。そこには、非常に簡単だが地図が描かれており、その酒場には赤丸が印されていた。

その紙を大事そうに折り畳み、懐へとしまうリイナ。

俯き気味だった顔をあげた時、彼女の表情にくもりはなかつた。

兄妹の別れ 少女の旅立ち（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

少女達の邂逅

「えーっと…。地図ではこの辺りのはずなんですが…」

身支度を終えたリイナは、早速兄に言われた通りに人を、正確には教えられた店を探していた。

「…困りました。全くわからないです…」

地図を書いた紙を片手に頭を抱えていると、一人組の男が声をかけてきた。

「ん？ どうした、嬢ちゃん。こんな辛氣くさい所でよお」

「暇なうおじさんたちと遊ばねえかい？」

二タニタと笑いながら近づく一人の男。普通なら生理的嫌悪感を覚える所だが、リイナもその例に漏れず、ものすごく嫌そうな顔をした。

だが、利用できるものは利用しろと思い、逆に男たちに話しかける。

「え？ 暇ではないですか…。あ、ここに描いてあるお店って知つてます？」

「あ？ そんな事どうでもいいかられ。いい所に行いつぜ？」

「やつやつ」

「そうですか…。なら、他の人をあたります。ありがとうございます」

した

男たちの言葉を完全に無視しながら、リイナは用がすんだと踵を返して歩き出す。

「なつー!? … 嫁ちゃん、舐めた事してくれるじゅ…」

「鬱陶しいです。消えてください」

抜き打ち一閃。腰に履いた剣を、振り返りながら遠心力を利用しながら振る。所詮はゴロツキ。リイナの動きが見えるはずもなく、その刃に成す術もなく倒れた。

「お、おい！ しつかりしろー！」

「大丈夫です。峰打ちですから。… で、この場所を知ってるなら案内してください。知らないなら… 消えてください」

剣を鞘に納めながら凄む。

慣れない事をしたと心中で悔やむリイナだったが、男は面白いようにはねながら場所の説明をして、氣絶した男を担いで逃げていった。

「逃げるの速ー! … ま、話も聞けて場所も分かったんです。ラッキーですね」

喜びを体で表すリイナ。その姿は、ずいぶん場所に対してミスマッチだったが、誰も気にする者はいなかった。

カラランカララン…

酒場の扉についた鈴が、乾いた音を鳴らして来客を知らせる。

リイナは初めて見る酒場の雰囲気に、キョロキョロと辺りを見渡しながらテーブルに近づく。

「…いらっしゃい。あんた、ここいら辺じゃ見ない顔だが、誰か探してんのか？」

店のマスターとおぼしき大男が、リイナに話しかける。

「はい。えーっと、ユフュルニカ・シーファスさんを探して」

リイナがそう答えると、マスターは頭を抱えて大きなため息を吐く。

「はあ…。お前さんもか…。頼むから店を壊さんでくれよ…。おーい！ シーファス！ あんたに寄だ！」

泣きそうな顔で愚痴ると、大声を張り上げて目的の少女に声をかけ

る。

「じゃあ、あとは任せたぞ。ワシは奥に引っ込んでるから」

「え？ それってどういって…」

「あなたね？ あたしに用がある密つて言つて奴は」

マスターが店の奥に消えたのと入れ替わりに、二階から少女が現れた。

薄い金色の髪を二つに束ね、挑戦的な翡翠色の瞳でリイナを見つめている。

「はい。兄様の紹介でやつてきました」

「兄？ …ああ、あなたレイソル・ハーキュリーの妹なのね？」

「はい。そうですけど…」

「へえ…。あの男も律儀ねえ。すドにこの事が暇潰しだわ」

顎に手を当てて笑う姿はとても絵になつており、まるで一枚の絵画のようだつた。

「あのー、私は何をすればいいんでしょうか？」

「そうね…。あなたの兄は何て言つてあなたを送り出したの？」

「えつと、『お前もそろそろ旅でもして世界を見るべきだ』って。

父様も母様もそれに同意してゐつて言つてました

「ふーん…。ま、あなたにしても、りいのは私の旅のお供よ」

「はい？」

「今までの奴らなら、追い返すか戦つて叩きのめしてたんだけど、あなたは楽しそうなもの。見ただけで分かるわ」

獲物を見つけた時のよくな楽しそうな顔で言うコフュルニカ。その話を、リイナは田を点にしながら聞いていた。

「分かる？ 何がですか？」

「あなたの体から感じる、大きな魔力の話よ。かなり大きい、一介の剣士が持てる量ではないわ」

「ええ。私は生まれながらにして強大な魔力を持つて生まれたと聞きました。そして、剣士の家系であるがゆえに聖靈の加護を受けれなかつたと」

「…だからね。わざわざ自分の妹をこんな所まで送りつけたのは…。結構強かじやない、王国騎士団長さん？」

「はい？」

レイソルの思惑に気づき、含み笑いをこぼすコフュルニカ。その真意が分からず、リイナはただ首をかしげることしか出来なかつた。

「つまり、あなたの兄はあたしに魔力の制御を学べと言いたいんじ

やないかしら？ 全く、あたしを「」を使つなんて初めての男よ？

「え？ じゃあ、もう魔法の暴発を気にしなくなれるんですか？」

「それはあなたの努力しだい。どうなるかなんて私にも分からぬわ」

「そう、ですか…。でも、頑張ればみんなに迷惑をかけなくてすむよ！」

俯いて思考の海へと没頭するリイナ。だが、その暗くなつた表情もすぐに明るく、まっすぐにコフュルニカを見つめ返す。

「…私、やります。あなたと一緒に旅に出て、兄様に強くなつたつて褒めてもらつんです！」

「…やう。じゃあ、行きましょうか。あたしの名前は、知つてるだろうけど、コフュルニカ・シーファスよ。コフィーと呼んでくれて構わないわ。あなたは？」

「あ、私はリイナ・ハーキュリーです。リイナって呼んでください」

「分かったわ、リイナ。後、敬語なんていらないから。気軽に喋つてくれて構わないわよ？」

「…気軽に、ですか？ でも、ずっとこの喋り方なので、このままが良いんですけど…」

「…なるほど。ならいいわ。無理強いをする気はないし」

「じゃあ、旅の仲間として……」

そう言つて手を差し出すリイナ。その手を見て、ユフィーは眉を顰めて難しい表情を浮かべる。

「旅の仲間じゃなくて、私の扱いとしてはお供、何だけれどね。ま、いいわ。よろしく、リイナ」

「はい！ ユフィー！」

一人の少女は、笑つて手を握り合つた。

少女達の邂逅（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

三人と一人

「 ケーーと、これからどうしたい？ シオン、ケーちゃん？」

露店街から抜け、宿屋などが揃う宿場を歩く最中、カナが唐突に話を持ちかける。

「 どうつて…。僕らは僕らの目的があるんだ。それを達成するため に動くんだろ？」

「 ケーは一人についていくだけよ？ だから、行き先は一人次第」

「 うーん…。確かにそうだよねー。でも、私達が欲しいものは、さ すがにこの人数は無理だよね…」

「 うん。人数と言つより、戦力だよね」

カナの判断に付け加える形でシオンが同意する。

だが、そんな中でケー一人が首をかしげていた。

「 二人の欲しいものつて、いつたい何だニヤ？ やっぱり、トレジ ャーハンターとしてはお宝なの？」

「 いや、違うよ。そんな分かりやすいものじゃないんだ」

「 そうそう。それに、二人じゃなくてほとんどシオンだけだしね」

「 そうなの？ ケーはてっきり一人が欲しいものかと思ったニヤ」

「まあ、あの言い方じゃ仕方ないよね。……「一ん……どこか落ち着ける所で話そうか。」この話は長くなるし」

「シオン？ いいの？ 話しかやつて？ 下手したら……」

「いいよ。仲間なんだし、どうせすぐこバレるや」

「……まあ……。やつぱりシオンね。嘘はつけない」

「ははは。」めん

「？？？」

クーの疑問をやんわりと避けていた一人だったが、シオンの一言によりカナの表情が曇る。

だが、憑き物が落ちたような晴れやかな顔で告げるシオンに、カナは一の句が継げなくなつて反論を放棄した。

そんな一人のやり取りを見て、クーの頭には?しか浮かばなかつた。

「さて、あなたと旅をするのは決定した訳だけど……。早速旅の目的

を決めないとね

「目的、ですか？」

「ええ。ただ闇雲に旅をしても仕方ないでしょう？ 折角だから何か楽しめるものが無いと張り合いか無いわ」

やれやれと言つた様子で首を振るユフイー。その仕草を見て、リイナは何かを考えるように顎に手を当てて俯いていた。

場所としては、一人が出会つた酒場兼宿屋から移動はしていない。奥に逃げるよう引つ込んでいたマスターも、被害が無い事を悟ると表に出てきていた。

「… それならユフイー？ 私の用事に付き合わせる事になるんですが、いい案はありますよ？」

「いい案？ 言つてみて？」

「はい。えつと、」れも兄に頼まれた事なんですけど…」

面白そうだと食いつくユフイーに、リイナは兄に頼まれた事を話す。

噂の事、兄の遠征、全ての事を。

「へえ…。月の信仰を取り戻そとする過激派集団ねえ。面白い話が聞けたわ

「ユフイー…。笑い事じゃないんですよ？」

リイナの話を一通り聞いた後、クククと含み笑いを漏らすユフィー。それを呆れ顔で咎めるリイナだったが、次の瞬間ユフィーがリイナにとつて最も重要な一言を発する。

「…その過激派集団となら、あたしは前に一度接触してるわ。…それも帝国領でね」

「え…？ それ、本当ですか！？」

「ええ。その過激派に協力してくれとも言われたわね。確か昔の文献にも記されているけど、ここエスカレルニアよりもフォーゲルノートの方が元々信仰は深かったの。だからじやないかしら。帝国領で出会った訳は」

「なら、帝国が発端だと言つんですか？ この噂は」

「やうだ、と断言は出来ないわね。ただでさえ情報が少なすぎるの。そいつ思ひのほ早計よ？」

「やうひですね…。あ、でもこの事を兄様に伝えないと…」

「どうやつてよ。兄がいる会談場の場所は知らないのでしょうか？」

席から立ち上がり店から出て行くとするリイナを、ユフィーがいつの間にか頼んでいたハーブティーを飲みながら制する。

「あ…。やうでした…」

「分かればよろしい。場所さえ分かれば、あたしが召喚魔で伝えてあげられるんだけどね」

「うーん…。あ、そう言えば…」

万策尽きたと、一人して頭を抱え込んでしまう。まあ、ユフイーは足を組んでカップを傾けているのだが。

「ん？ どうしたの、リイナ？ 何か思いついたの？」

「いえ、思いついたと言つより思い出しまして…。確か『最近名を上げている二人組みのトレジャー・ハンターがいるから、その人達にも聞いてみたらどうだ』って兄様に…」

「兄様さまさまね…」

「当然です！ だって私の兄様ですから！」

「あー、はいはい

拳を握りしめて身内自慢を始めるリイナに呆れ、ユフイーは棒読みに言葉を返すしかなかつた。

「（でも、そのトレジャー・ハンターとやらには会う必要がありそうね…）ねえ、その二人組の特徴は何か聞いていいの？」

「え？ …特徴は、男女で男が魔導師、女が槍使いですけど…」

身内自慢を切り上げ、ユフイーに説明を始めるリイナだったが、その視線はフラフラと定まっていなかつた。

「職業よりも他に何があるでしょう？ 髪の色、瞳の色、人相とか。

…まさか、聞いていないの？」

疑いの眼をもつてリイナを見つめるコフイー。

その手にはなぜか、情報屋の男に食らわせようとした紫電が。

「えーっと…。コフイー？ 聞いてないって言つたら、どうするんですか…？」

「わうね…。少し痺れてもううだけよ。少しね

伏せ目勝ちに問いかけるリイナに対し、コフイーは真っ黒い笑みを浮かべながら手に纏わせた紫電を見せる。

「いやー、それだと痺れるだけじゃないんじゃ…」

「大丈夫よ。加減はするし、あなたには魔法の耐性もありそつだし

」

「いやいやいやー、大丈夫じゃないですってー、しかも何でそんなに楽しそうなんですかあー！」

「樂しいからに、決まってるじゃないー！」

「いだだだ！ し、しひれーーー！」

リイナは涙眼にななりながら抵抗を繰り返したが、その抵抗も虚しく雷魔法をその身に受けたのだった。

いたたた！ しひれぬ＝！」

所変わつて、ここはアライとリイナがいる店の前。

落ち着ける所を探して宿場を探していったシオンたちがそこについた。

今のはて懇鳴じやなしのか——ヤ？

その店の中から聞こえてきた悲鳴にも似たリイナの声に、クーが尻尾を逆立てながら反応する。

「はあ……。どこの町もこいついう場所に来ると一緒ね。……クズしかい

その手にはなぜかレストーシヨンが握られており、カナの体からも殺氣にも似た鬪氣が溢れていた。

「……ははは。……いい加減しまいなよ、色々とわ」

「いやーだー！ またあんなのが来たら嫌だもん！」

苦笑を漏らしながらカナに注意するシオン。だが、カナは槍を胸に引き寄せて拒否する。

「まあ、分かるのは分かるんだけどさ」

「…逆に相手に同情したくなるのニヤ」

そんなカナを見て、シオンとクーは顔を見合わせながらため息を吐く。

その間に何があつたのかと言うと、カナがナンパがあつたのだ。ナンパと言つても、ほとんど恐喝に近い事をしてきたバカな二人組の男に。

その行為に切れたカナが、レストーショーンで半殺しにしてしまったのだ。

その時のカナは、シオンが水魔法で頭に水をぶちまけてやるまで止まらなかつたそうな。（クーはそんなカナに怯えていたため、何も出来ていらない）

「な、なんにせよ、宿屋についたんだし、さつさと入らない？」

やり過ぎたと自覚しているのか、少し慌てながら店の扉を指差す力ナ。

そんな珍しく慌てるカナを見て、シオンとクーは笑いあつた。

三人と一人（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

出会い 世界の理

「あー、うー。まだ髪の毛がパリパリいつてますよー…」

ようやくユフイーの雷魔法の呪縛から解き放たれたりイナが、ボサボサになってしまった髪の毛を直しながら愚痴る。

その雷魔法を放ったユフイーは、そ知らぬ顔で一杯目のハーブティーを飲んでいた。

カラソカラソ…

そんな一人の後ろ側から、来客を知らせる金の音が鳴る。

「…いらっしゃい。今日は新顔が多い日だな」

その来客を迎えるため、無愛想ながらもマスターが出てくる。

「新顔？ あ、三人ですけど、空いてますか？」

「ああ。適当な所に座つてくれ、注文は後からとる」

「分かりました」

マスターの言葉に淡々と少年が答えると、入ってきた三人は手ごろな席へと座る。

「あのー、ユフイー。あの三人の人達…」

「魔導師と槍使いね。獣人の子は知らないけれど、あの男…」

「どうしました？」

「いえ、ちょっとね…。（あの男、魔力総量はリイナには劣るけれど、あの魔力の流れは見た事が無いものだわ…）」

目を細め、他の二人と親しげに話す男を睨むユフィー。男に見えた魔力の不規則な流れを突き止める為に、さらに睨みを利かせていると、目の前にリイナが現れた。

「…ちょっとリイナ。どきなさい」

「駄目ですよ。そんなに怖い目で睨んじゃ」

「…」うるせこわね、私はあの男に興味があるの。だからどうして

「そんなに興味があるなら聞けば良いじゃないですか。あのー！」

「ちょっとー リイナー！」

凄むユフィーもなんのその。手を上げながら三人の元へと歩いていくリイナ。その突飛と取れる行動にユフィーは驚いて声を上げるだけだった。

「？ はい、なんですか？」

「えっと、あなた達はトレジャー・ハンターの方ですか？」

「うん。確かにそうだけど…。君は？」

「あ、申し送れました。私はリイナ・ハーキュリー。あなた達に伺いたい事があるのですが」

「はあ…。あ、僕はシオン・セナ。で、この二人が…」

「カナ・コルセルニアよ。ハーキュリー家の『令嬢さん?』

「クーはクーだニヤ。ついさつきについて行く事になつたから色々聞くなら二人にするといじよ?」

「で、聞きたい事つて何かな? ハーキュリーさん」

お互いの自己紹介も済んだ所で　　まだ一人済んでいないのだが
シオンが人当たりのいい笑顔を浮かべてリイナに問い合わせる。
「ではお伺いします。あなた達二人が巷で有名なトレジャーハンタ
ーですか?」

「「はい?」」

「いえ、ですから…」

「あなたねえ…そう单刀直入に言つものではないでしょ?」

リイナの要領を得ない質問に、シオンとカナの二人の声が重なる。
相手が理解していない事を認識できていないリイナは、さらに質問を続けようとするが、そこにユフİYEーが現れて止められる。

「…あたしの事は知つていいでしょ? 特にリイナをハーキュリ

一家の「」令嬢だと言つたあなたは

「…？ あー、確か召喚魔導師の！」

挑発するように、コフイーがカナに視線を向ける。カナは最初は首をかしげていたが、後になつて手を叩いて納得した顔をする。

「ま、分かつてくれたのはいい事だけれど、あたしの興味は今あなたには無いの」

「へ？」

何かあると予想して身構えていたカナは、予想に反したコフイーの言葉に間抜けな声を出してしまう。

そして、そのコフイーはと黙つて他の者には田もくれずこの歩を出した。

シオンに向かつて。

「…あたしが今興味を持つてるのは、あなたよ

シオンを指差して宣言するコフイー。

「え？ 僕？」

自分を指差して、キヨロキヨロと周りを睨みシオン。

だが、周りの者達は手を振るか首を振るばかりで、シオンはもう一度自分を指差して答えた。

「僕、ですか？」

「そうよ。あたしはある程度相手の魔力を感じる事ができるの。ま、魔導召喚師の特権つて奴かしらね？…それで、あたしはあなたの魔力に違和感を感じたの」

「シオンの魔力に違和感？まさかシオン、病氣とかなの？」

「それは嫌ニヤーー！」

ユフィーの言葉にカナがそう反応すると、クーがシオンへ飛び付く。シオン、この短期間でずいぶんなつかれたようである。

「シオン！ 大丈夫なのかニヤーー？」

「うわわ、大丈夫だつて。病氣なんかじやないよ」

「ええ。この男は病氣なんかじやないわ。ただ、あたしが言えるのは、魔力の流れが他の者と微妙に違う事くらいかしらね」

「え？ それってどういう事ですか？私の時は何もなかつたですよね？」

事の次第を静観していたリイナだつたが、ユフィーの言葉を聞いて心配そうに訪ねる。

「ええ。リイナには説明しておきましょうか。魔法の特性と言つものを

そこからはずゴフィーの独演会だった。

リイナはむちるんの事、魔法の適正がないカナとクーも、食い入る
よに話を聞いて。そんな中、シオンだけが影のある表情でゴフィ
ーを見ていた。

「知つてはいるだらうナビ、この世界の魔法は根元である聖靈の九
属性からなつてゐるわ」

「はい。炎、水、氷、風、雷、土、光、闇、時ですね」

「その属性一つ一つに、ある波長があるとあたしは思つてゐるわ。
ま、これはあくまでも魔導召喚師の話だけれどね」

「波長? どういう事なの?」

「あたしに見えてるのは、その者が得意とする属性、つまり強く
聖靈の加護を受けた属性が見えるのよ。炎なら烈火の炎とき揺らめ
き、氷なら冷たくて固い、見たいにね」

「へー。クーは殴るか、飴を作るしかできないからよく分からない
よ」

「そこ」で、この男にはそれが見えないの。この状態なら、特に得手
不得手もない。く普通の面白くもなんとも無い魔導師なんだけれど、
見た事のない揺らめきがこの男からは感じられるの

「……」

その『この男』であるシオンは黙つたまま。ただ無言でコフイーの視線を受け止めていた。

「そうそう。さつきリイナが言つた九属性の中の時は、完全に例外よ。それだけはどの相克にも関与しない、特別な属性なの。それに、その魔法が扱える術者もいないわ」

「特別…。じゃあ、私が使う無属性とも違うんですか？」

「当たり前よ。無と言つは何も無いのよ？ それこそ相克からは外れているわ。それに、無属性魔法は魔力が高いものなら誰でもできるの」

「じゃあ、なんで例外なのよ。相克から外れるつて言つたし、術者がいないつて事は加護が無いつて事なの？」

「考へてもみなさい。時は必ず上位にある存在よ？ 例えば私の氷魔法だと、氷は水に戻され、その水は蒸発してなくなつてしまつわ。…いえ、加護は、受けられるはずよ」

「え？ それってどういう事？ 珍しくて例外なのにかニヤ？」

「ええ。確かに昔ある血族のみが時の魔法を使つていたはず…」

「…もういいだろ？ ここからは僕が話す。一人にも話さないといけなかつたし、ハーキュリーさんには知つていてほしい話だから」

コフイーの言葉を、シオンが椅子から立ち上がりながら遮る。

「へ？ 私ですか？」

突然自分の名前を呼ばれた事に驚きながらも、きちんと言葉を返すリイナ。

「僕の勘だと、ある噂の件で声をかけてきたんだよね？」

「はい。その通りです」

「…君も、それでいいよね」

そんなシオンの言葉に、コフラーは薄く笑つて話を促すように手を振る。

「…君は、分かってるの？ 僕の……」これから話す内容を

「いいえ。大体の察しさつこではこるけれど、やつぱり本人の口から聞いた方がいいじゃない？」

「（確信犯じゃないか…）」

腕を組ながらそう答えるコフラーを見て、シオンはしてやられたと肩を落としてしまう。

「…ふう。ま、いいか。…あー、でもどうから話せばいいんだろ…」

ため息を吐き、気持ちを落ち着かせようとシオンだが、考えが纏まらずに頭をかきむしる。

だが、惱むシオンの肩に手が優しく置かれた。

「別に構わないでしょう？ 元々、私たち一人に関しては…いや、私限定か。もう何を聞くのか分かつてるんだしさ。ま、魔力云々は元々分かんないけどね」

「力ナ…。ありがと」

力ナからでた言葉に、シオンは驚いた顔をするが、それも一瞬。すぐには気を取り直して感謝の言葉をのべる。

「…うん。うだうだ悩んでも仕方ないよね。話すよ、全部」

先程力ナとクーに見せた晴れやかな表情で、そう宣言するシオン。

シオンのその一言で、全員の注目がシオンへと集まる。

「僕は…僕の本当の名前はシオン・セナ・ファルカス。フォーゲルノート帝国第一王子にして王位継承者。そして、この世界で唯一『時魔法』が使える者だよ」

「帝国…第一王子…」

「シオン、偉い人だつたのかニヤ？」

シオンの告白に、リイナとクーの口から驚きの言葉が上がる。ユフイーとカナに関しては、元から知っていた事と予想がついていただけに、あまり驚いてはいなかつた。

「うーん、偉いかどうかって言われると微妙だね。僕は家を捨てた身だから」

「家を捨てた?なら、あたしが帝国にいの間に聞いた『王子出奔』の噂は本当だつたのね」

シオンの発言に、ユフイーが昔の記憶と照らし合わせるように同意する。

「本当つて言つが、ただの家出なんだけどね」

「…その大掛かりな家出を手伝つた私の身にもなりなさいよ」

「じめんじめん。感謝してゐつてば」

「手伝つた? どういう事ですか?」

カナの発言に疑問を持つたリイナが、その部分について質問する。

「カナは僕の家出を手伝つてくれたんだ。…間接的にだけどね」

「宝探しで王宮に忍び込んだ時に、シオンに見つかっちゃつたのよ。でも、その時のシオンは家出しようとしてる真つ最中。当然、王宮の警護の奴もついてきてたわ」

お互に顔を見合させ、その時の状況を話す二人。シオンは少し樂

しゃうに、カナは少しだから話す。

「で、警護の人達を撒く途中にカナと出会って、カナも巻き込んでの逃走劇になつたんだ。僕は連れ戻そうとする警護の人から逃げて、カナは泥棒として追いかけられたんだ」

「あの時はかなり理不尽に追いかけられたわね。だつて『盗賊の女がシオン殿下を拐つていつたぞ!』って言わながら追いかけられたんだから」

だんだんとその事に腹が立つてきたのか、頬を膨らませてシオンに詰め寄るカナ。

「うわー、それはまたきついですね。理不尽と言つか、当然と言つか…」

「でも、仕方ないと思つニヤ。そうした方が楽だつて聞いたことあるニヤ」

カナの言葉にリイナは同情し、クーはなぜか頷いていた。

「一国の王子を拐う女、ね。面白くじやない?」

面白い事が聞けたと笑みをこぼすユフィー。だが、その笑みはすぐに消える事になる。

「そう言えども、逃げている最中に時の魔法は使わなかつたんですか? そうすれば、もっと簡単に逃げれそうなのに…」

リイナがある種当然の疑問を投げ掛ける。

その疑問に答えたのは、先程まで薄く笑っていたユフィーだった。

「それは無理な話だと思うわよ？ 時魔法は基本的に術者を蝕み、最終的には殺してしまつ魔法『失われた魔法^{ロストマジック}』と伝えられているから」

「まあ、その言い方は少し大げさだけど、ほほその通りだよ

ユフィーの言葉に少し訂正を加えながらもシオンは同意する。

「時魔法は基本的に異質なんだ。時を操り、全ての現象を生み出す事は出来なくても終わらせる事は出来るんだ。…人の命すら操れる、禁忌の魔法と言つてもいいものだよ」

「人の命すら操れる禁忌の魔法…ですか」

「そう。だからこそ時の魔法は昔から隠されてきたんだ。『例外』と言つ言葉を使ってね」

寂しげに発せられるシオンの声に、全員が黙ってしまう。

そんな周りを見て、シオンはため息を吐きだすと淡々と語りだした。
自らの過去と帝国王家に伝わる伝承、月の信仰を回復せようとする集団『ルナースクルメア』について。

出余い　世界の理（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

シオンの過去

「どうかなさいましたか？ 父上」

一年ほど前、シオンは父、クルト・シン・ファルカスに呼び出され、玉座の間に呼び出されていた。

「…お前に話したい事があつてな。わざわざ呼び出してすまない」

「いえ。それは構わないんですが…」

玉座から立ち上がり、ゆっくりとシオンへと歩み寄るクルト。その父の動きに、シオンは少し眉を顰めていた。

はっきり言つて、シオンは父の事が苦手だった。

絶大な権力を持ち、この帝国の行く先を牛耳る国王。これだけなら、ただの王となんら変わらない。だが、父の自分に対する態度が苦手だった。

一步後ろに下がつた状態で息子の調子を窺う父。全ての台詞が作られたものに感じ、今まで一度も腹を割つて話した事は無い。

それがシオンとクルトの関係だった。

「話したい事と言つるのは王位継承の儀についてだ。それについては、大して問題もなく行われる予定だ」

「そう、ですか。…分かりました」

この王位継承という儀式もシオンを昔から縛る鎖だった。

シオンには母親がない。シオンが生まれて数ヶ月後に死んだと父から聞かされていた。

そのため、側室制と言つものが存在しない帝国王室では、シオン一人が王位継承権を持つ者なのである。

そして、その確固たる現実はシオンを縛る鎖となり、自由と言つ翼をシオンから奪っていた。

「その儀に関する事で、お前に見ておいてほしい物がある。…ついでに見てくれ」

「え？ は、はい」

珍しく主導的に動く父に、シオンは少し反応が遅れながらもついていった。

カツカツと靴の音が響く講堂を、シオンとクルトが歩く。

シオンがつれてこられたのは、今はほとんど使われていないはずの寂れた講堂だった。その講堂の奥は宝物庫になつてあり、シオンとしてはその宝物庫に用があるのだと思っていた。

だが、その予想は簡単に裏切られる事になる。

ガゴン…

「え？」

「さあ、こっちだ」

宝物庫にいたる扉に手をかけると思つていたシオンは、父が突然何も無い壁に手を当てた事に驚く。だが、その壁は鈍い音をたてながらへこみ、その奥にある薄暗い階段を出現させる。

その中に入る事を促しながら、躊躇無く足を踏み入れていく父に遅れないようにシオンは足を進めた。

その階段は深く、螺旋状に地下深くまで伸びていた。その石の螺旋階段を歩く音が響く中、クルトが唐突に口を開いた。

「シオン、今から見るのは王家に伝わるもので最も重要なものだ。我が一族、時の魔法を操る系譜に生まれ、その力行使できる者として知つておかねばならぬ事がある」

「…分かつています。時の魔法の強大さ、そして…その異質さを理解しておかなければ『死』を迎えると」

「…そうか…。…ついたぞ。ここがお前に見てもらいたかつた場所、ロスト・タイムズ時の魔法が扱える者しか入る事を許されない『時の祭壇』だ」

父に促され、シオンが見たものは地下には似つかわしくない大きな鉄の扉だった。

「『時の祭壇』^{ロスト・タイムズ}…なぜこんな物が王宮の地下に? 大きさも的にもありえない」

その扉は、薄暗い事もあってか先が見えないほど巨大である。唯一確認できるのは、小さく開いた一つの穴と大きな紋様だけだった。

「それは私にも分からぬ。ただ、先代の王から言われてきたのだ。『時の魔法扱えし者現れた時、この場所を教え、中にある真理に触れさせよ』と」

「中にある真理? 確かに、『失われた魔法』^{ロストマジック}と呼ばれるものですから、何が出てきても不思議ではありませんが…」

「そう言つ事だ。…そこにある一つの穴に手を入れて魔法を流し込めば扉は開かれるはずだ」

クルトが扉に開いた穴を指差す。

その穴を見て、シオンは少しためらつた。このまま父の言つ通りにしていいのかと。

基本的に、シオンは父を苦手としていたがその言葉は忠実に従つていた。それが正しいと信じていたし、信じさせられていたからだ。

それなのになぜ、今になつて父の言つ事を疑つたのか。それはシオン自身にも分からなかつた。

「……」

だが、その父の言葉に結局は従い、穴に手を差し入れる。そして、

その穴に魔力を、時の魔法を流し込んでいく。

「（悠久に流れる、時の調べよ。我が呼びかけに答え、その流れを止めよ…）」

発動の鍵である呪文を頭の中で唱えながら、体の中にある魔力を練り上げる。

すると、扉に描かれていた紋様が鈍く輝きだし、扉周りが振動する。

「…『時の破壊^{タイム・ブレイク}』」

呪文を唱え終えると、紋様の輝きが一層増し、地下を揺らす振動も大きくなる。

そして、扉がゆっくりと開かれ、その中にあるものを見せ始めていく。鈍い音を立てながら開く扉の中に、シオンは足を踏む入れる。

「…」これは？

時の祭壇の中には、少々小さいが珍しい金属製の机が一つ。その机の上には、ある物が置かれていた。

「…ネックレス？ でも、こんな紋様は見たこと無いな」

シオンが手にとったものは、丸型のプレートに十字架が彫られたネックレスだった。

銀細工のようだが使われている金属が違う、微力ながら魔力を感じとれるような雰囲気があった。

「他には…何も無いな」

他を見渡しても何も無い事を確認すると、シオンは外へと出る。すると、シオンが外に出た事が分かるように、開く時と真逆でかなりのスピードで閉まった。

その事に驚きながらも、ゆっくりと父の元へと歩き出すシオン。そんな息子を、クルトは微笑と共に迎え入れた。

そして、来た道を戻つて講堂へと戻る。ようやく明るみに出た事で目を細めるシオンに、クルトは優しく言葉をかけた。

「よくやつたな、シオン。我が一族の秘宝を良くぞ手に入ってくれた」

「一族の秘宝? どういう意味ですか? 父上」

「言葉通りの意味だ。あの祭壇に封印されていた秘宝を、お前が取り戻したのだ」

「封印? どういう事ですか、父上。僕はただ、時の魔法が使える者だからと…」

「言葉の意味が分からず、父へと詰め寄るシオン。

「それは本當だ。封印については、その秘宝を扱える者がいなかつたから封印していただけ。扱える者が現れれば封印を解く。当然であらう?」

「まあ、確かにそうですが……」

シオンが手に持つネックレスを見つめながら渋々納得する。

シオンが納得した事を確認したクルトは、ネックレスについて語りだす。その忌まわしい過去と共に。

シオノの過去（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

予兆

「それの名前は『時の証』^{エヴァイデンスロック}と言つ。時の魔法が扱える者しか着ける事が許されない、特別なものだ」

『時の証』。帝王国家に伝わる、最高の秘宝。

見てくればただの十字架が彫られたネックレスだが、その材料には『魔法石』と呼ばれる生成困難な魔力結晶が使われている。

魔法石はそれ自身が魔力を持ち、それを扱う者の手助けをするように作られたいわばブースターのような物になつており、大変高価で知られている。

その魔法石が使われていると言つ事は、この時の証はかなりの価値のある物という事になる。

「王の証としても使われる事からこの名がつけられたが、ただでさえ時の魔法が扱える者が少ない。そのため、誰にも触れられないよう前に前の所有者が封印をかけたのだ。時の魔法を使って」

時の魔法は重複して発動すると、その効果が消えてしまうと言つ欠点がある。それを利用した前所有者は、祭壇の扉を時の魔法使って時を止め、開けられないようにしたのだ。

そこに、新たな時魔法を扱える者が現れ、魔法を発動させると扉にかかっていた魔法の効果が消えるという仕組みなのである。

「ですが、なぜ今までして他の者から隠したのですか？」 時魔法

を扱える者しか着けられないんじや…

「…そこが問題なのだ。魔法石が使われている事を知った馬鹿な権力者が、時の証を持ち出し使用した事件があった。…だが、その権力者は死んだ。時の証の魔力に食われたんだよ」

「… そんな…！」

シオンの質問に、暗い表情をしながら返すクルト。その過去を聞いたシオンは眼を伏せ、唇を噛み締める。

時の魔法が異質と『失われた魔法』と呼ばれる最大の理由は、間違った扱いをした瞬間に死ぬと言つ扱いの難しさにある。

そもそも、適正の無い魔法を扱おうとしている時点で間違っているのだが、その反動が大きすぎるのだ。良くても悪くても死が待っている、これが時魔法の異質さだ。

「その事件以来、時の証は遠ざけられてきた。扱える者がいないのも手伝つてな」

「…ならば、なぜ父上は僕にこれを？」

父の顔にわずかに浮かぶ狂気の表情に、シオンは嫌な予感がしながらも問い合わせる。

だが、その選択はシオンを後悔させる事となる。なぜ、あの時に問い合わせたのだろう。

「決まつていいである!」、その力を使い、月の信仰を取り戻すの

だ

「つー どうじう事ですか父上ー？ あの教団とは手をきつたはずです！ なぜ今『じゅ』になつてあのように連中の事を……ぐつ！」

父の発言にシオンは驚きの声をあげ、抗議する。

だが、どこか陶酔したような様子のクルトに、息子の声は届かなかつた。その証拠に、目の前にいるシオンを魔法で弾き飛ばした。

「ふん！ お前には月がどうこう存在か分かっていなうだな！ このエスカレルニアとフォーゲルノートの二つの月の存在がいかに偉大かを！」

「……ぐ……父上、何を！？」

床に転がつたシオンを、憤りのこもつた目で睨むクルト。そして、今まで父親に手をあげられた事のなかつたシオンは、信じられないと言ひ表情で父を見つめる。

だが、そんな眼差しはクルトには届かない。シオンを睨んだまま呪文を唱え、捕縛用の魔方陣を構築するクルト。

「お前は知る必要がある。唯一の時の魔法が扱える者、全魔導師の上位者として！ お前は、この偽りの世界を壊さねばならない！！」

「上位者？ 僕はそんな者になつたつもじも、世界を壊すことなんか望みません！」

「いいや、望まねばならない。全てを知つた時、お前にも分かると

きが来るー。」

構築されていた魔方陣が完成し、シオンを包み込もうとその光を揺らめかせる。

「全てを知った時？ 父上は奴らから、いえ『ルナースクルメア』から何を聞いたんです！？」

その光に抗い、魔方陣から抜け出して父へと叫ぶシオン。

広い講堂に、親子の悲痛な叫びが響きあう。父親は息子に分かつてもらえない苦しみに。息子は父親の意図が掴めない悲しさに、ただ叫ぶ。

だが、その叫びもクルトの眩きによつて遮られる。

「……」の偽りの世界を正し、誰もが幸福で平和な世界『^{エンタレキア}真世界』へと…

「……『真世界』……？ ……まさか、ルナースクルメアは……」

クルトの眩きが耳に、脳裏に引っかかり考え込むシオン。だが、ゆつくりと考えている暇は無かつた。

「……『土の鎖』！」
アース・チェイン

「……はつ！ 父上！？ こんな場所で攻撃魔法なんて！？」

クルトの足元の講堂の地面が隆起し、地面から土色の巨大な鎖が出現する。

膨大な質量と共に迫る巨大な鎖を、すんでの所で気づいたシオンは防御用の結界、魔法障壁を作つて防ぐシオン。

魔法同士のぶつかり合つた余波が、全ての窓を叩き割る。それによつて生み出された土埃の舞う講堂に、クルトの嘲笑が響き渡る。

「……くくく……あーはつはつは……さすがは上位者と呼ばれるだけはある！ 魔力ではお前が私に勝てる道理は無いと言つのに、こうも呆氣なく防がれるとはな！」

「くそ……！ （どうする？ そつ何回も混成属性魔法は使えない…。なんとかして父上の注意を逸らさないと…。）

クルトは、自らの魔法を防いだ障壁をシオンの時魔法によるものだと思い込んでいるが、それは全く違う。全ての魔法の属性が扱えるシオンだからこそできる技、『クロスマジック魔法混成』を使つたせいである。

この技は欠点を補い合う事が本質である。土には基本的に水と風が効果的だが、さらにその効果を上げる属性も存在する。炎や雷で土を焼けば、後はその力で押し流すだけなのである。

その条件を利用して、シオンは魔法障壁を一重に展開していたのだ。一つ目に炎と雷の障壁。二つ目に水と風の障壁と言つように。

「……私もこのよつな事は本望ではない。だが、お前のその力があれば真世界への扉は容易に…」

手を差し出し、微笑を浮かべながらシオンへと近づくクルト。それを拒むよつにシオンがたらを踏んでいると、講堂の外から警護の

者の警笛が聞こえてきた。

「陛下！！！ 殿下！！！ 賊が王宮に侵入しました！ 玉座の奥へとお逃げください！！！」

「… なんだと…？」

「（しめた！）…『風の圧壁』！」
エア・プレッシャー

それを逃げ出す好機と見たシオンは、講堂を押ししつぶすように魔法を発動する。

発動した魔法は、巨大な大気の壁を作つて対象をその大気の壁で押ししつぶす魔法。その魔法を、講堂を押ししつぶすように発動したと言ふことは。

ズゴゴゴゴゴ…

当然、建物など簡単に崩れ去る。

「シオン！ 貴様！！ ええい！ シオンを捕まえろ！」

間一髪、崩壊する講堂から脱出したクルトは、部下の者達に指示を下す。国王の突然の命令に、皆一様に驚く者ばかりだったが、すぐに氣を取り直してシオンを追う。

その様をゆっくりと眺めると、クルトはおもむろに歩き出す。玉座の間に向かって。

「…シオンよ。お前にならやれるのだ…。私には出来ない、この世

界を正す事が……」

そう呟きながらゆっくりと歩くクラルトの途中は、ひどく寂しげなものだった。

「…」これが僕の、知っている事全て。そして、カナに出来前今までの話だよ

シオンがコフイーと同じハーブティーのカップを もつとも、コフイーは砂糖たっぷりに、シオンはそのまま飲むため同じとは言いがたい味になつてはいるが テーブルに置きながら、そう言つて話を終えた。

「ちょっと、シオン？ 私と出来前と言つか直前にそんな事があつたの？」

話の中になつた出来事と、最後の言葉を照らし合わせたカナが、シオンの肩を掴んでガクガクと揺らす。

「う、うん。って、言つか、揺らすの、やめて」

「あ、ごめんごめん」

謝りながらシオンの肩から手を離すカナ。

揺さぶりから解放されたシオンは、リイナに向き直つて真剣な眼差しを向ける。

彼女にすべてを伝え、目的が同じだと言つた。

「えーっと、話を聞いていたら分かると思うけど、君が調べている団の一団は、ルナースクルメアという一種の宗教派閥なんだ」

「宗教派閥？集団じゃないんですか？」

「円の信仰集団の中でも、もつとも過激なのがその派閥なんだ。今まで細々とやっていたはずだけど、最近になつて騒がしくなつてきてね」

「過激…あ、兄様も言つてました。一部の過激派集団の思想が上方にも蔓延し始めてるって」

「蔓延し始めてる、か。エスカレルニアは分からぬけれど、フォーゲルノートはほぼ全員そうだよ。恥ずかしながらね」

頭をかきながら、申し訳ないと言つた顔で苦笑するシオン。

「いえ、決してそんな事は…」

「ま、恥ずかしいですむものではないわね。一国の王が信者となつてこらのだから」

「ははは。全く、あなたの言つ通りだよ」

シオンの言葉を否定しようとしたリイナだが、コフィーにその言葉を遮られてしまう。そして、そのコフィーのきつぱりとした言葉を、シオンは乾いた笑みで受け止めた。

「…本当にね。…僕は、父上を止められなかつたんだ。…本当、恥ずかしいよ」

沈んだ表情で俯き、小さな声で呟くシオン。だが、シオンが沈んでいるのは文字通り一瞬だった。

「…だーー！ もつ！ 今からでも止められるかもしれないっていつも言つてるでしょ！？ そのために旅をしているんだし！ いつまでもうだうだ悩むなーー！」

ドガツ

「ぐへつー！」

シオンの言動に急に立ち上がつた、カナの怒り？のストレートがシオンの顔に突き刺さる。

どうでもいいが、今まで座つていたシオンを吹つ飛ばす程の力とは、カナも大概の常識はずれである。

「…カナ…。多分…うつん、絶対に素手でも魔物が殺せるよ…」

「いや、さすがにそれは無理があるかと思つんですが…」

その威力を見たクーは、カナに対し『絶対に怒らせたらダメな人』と言つ認識を追加し、リイナはクーの言葉に静かに突つ込んでいた。

「カナ…。本気のストレーントは止めてよ。痛いなんかじやすまなくなるかられ」

「ハヌカー、ハジハジ言つてゐシオンが悪いんだからー。」

吹っ飛ばされたあと、殴られた頬を押さえながら戻つてくるシオン。殴つた本人のカナはまだ立腹で、腕を組んでぶいと顔を背けてしまつ。

「…あなた達、痴話喧嘩をするのは結構だけれど、話を続けてくれない？ あたしとしても、まだ聞きたい事があるのよ」

そんな一人を見かねたユフィーが、話の進行のために声をあげる。

その有無を言わぬ雰囲気に、声をあげようとしていたシオンは少し萎縮しながらも話を戻した。

「……うほん。えーっと、どうして話したつ」

「ルナースクルメアの話よ。まあ、そつは言つても他に情報などいへん無いのでしょうか？」

「うん。確かにその通りだよ。でも、一つだけ確かなのは、近々必ず戦争が起ころよ。…フォーゲルノート帝国がエスカレルニア王国に宣戦布告する」

最後の言葉は、他の者達には聞こえないような小声で宣言するシオノ。だが、最初の言葉だけでも他の者達には衝撃を与えていた。

「戦争、ね。そんな単語、生きてこられたのに聞けることがあるなんてね…」

シオンの言葉に、いろんな感情が入り乱れていくコロニー。

「…兄様の予想した通りですね。さすが兄様です！」

リイナは「こにはいない兄になぜか称賛を送る。

「うにゃー。ますますお店辞めといてよかつたよう。こんな感じで絶対に売れないと…」

クーは自分の選択が正しかつたと、ほつと胸を撫で下ろす。

「全く…分かつてはいたけれど、かなり面倒な事に巻き込まれたわね…」

カナは予想していたよりも深刻な状況に、頭を抱えていた。

「とは言つても、いつ起つるかなんて分からないし、本当に起つると言つ確証もない。この話は大半が僕の推測だよ」

「でも、実際にその集団はいて、その思想が広まつていいんですね？ なら、それは正しいですよ。えーっと、シオン…さん？ 様？」

肩を竦めるシオンだが、その言葉にリイナは共感して声をあげる。だが、シオンの呼び名を決めかねたようで、肝心な所で躊躇してしまう。

「あー、シオンでいいよ。さつきも言ったように、僕はこのファルカスと言つ名を捨てたようなものだからさ。様なんてもつての他だし、できれば呼び捨てで呼んでもらいたいかな」

「あ、そうですか。それなら私もリイナって呼んでください。ハイキュリーの名は、兄様が名乗るに相応しいものですから」

笑いあつて再度名前を名乗り会つ一人。それに便乗してか、他の二人も再度名前を名乗りあつた。

その中で、ユフィーが普通に名乗つて愛称まで紹介したことに、噂を聞いていたカナが驚きの声をあげたりしていた。

予兆（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

「で、いきなり話は戻ると言つたか変わるんだけじゃ。他に話す事つてあつたっけ？」

話していた内容が濃かつたためだらう。一度田の血口紹介が終わつた辺りで、シオンがそんなすつとんきょうな事を言い出す。

「…あなたの時魔法の事よ。…ま、他の子達はあまり関心がないみたいだけれど？」

そんなシオンの疑問を、ユフィーが呆れながらも返答するが、周りを見返してさらに呆れてしまう。

「ねえねえ、リイナの家つてあのでかいお屋敷よね？」

「そうですけど、そんなに大きいですか？ それに、私はあまり本家の方には行かないで…」

「あれは十・分・に・でかい！ 私みたいな一般人にとつてはね！」

「そうだニヤ！ クーみたいな獣人族だつたら、メイドさんみたいなのじゃないと入れないのに！」

「え？ ええ？ ちょっと二人とも、落ち着いてくださいよー！」

そこには、二人の少女が上流階級の少女に向かつて、一般人の不満をぶつけている所だつた。

この二人、先程までのシオンの話はあれこれぱぱつ忘れていたり
である。

「あー、確かにそうだね。それならコフラー、君だけにでも話そ
うか？ やっぱり、ここまで話したり全部話しておかないと」

「別にいいわよ。じつこはずれ垣間見る事になるでしょうから。あ
なたのその力をね」

「こずれ、ね。まあ、その通りになると思つよ。僕とカナがじつ
としている事を聞いたら

「じよつとしている事？ … まさか、ルナースクルメアによる一国
間の戦争を潰そうと考えているの？」

先程までの話の流れから、そう推測したコフラーは驚きながら、だ
が口は面白そうに歪みながらシオンを見る。

「潰そうって言つのは言つ過ぎだよ。…僕はただ、父上を止めたい。
地位も何もかもを捨てて逃げたけど、でもやっぱり戻すとして……
王子として父上の行為は見過せないんだ」

静かに自分の決意を語るシオン。その口は、しっかりと覚悟を持つ
た霸氣のこもつた口だった。

「へえ…。（やっぱりいい口をするわね…。色々と聞きたい事はあ
るけれど、リイナのためにもあたしのためにもついていった方が無
難ね）」

シオンの口を見て、感心した声をあげるコフラー。

そして、自分の考えを纏めあげたユフィーは、自信を持つてこう言った。

「……いいわ。あなたのその目的にあたしも一枚噛ませてもらうわ。もちろん、戦争を止めるなんて大言壯語な事は言わないから」

「え？ いいの？ ユフィー」

「ええ。私たちはあなたが現れるまで旅の目的を決めていたようなもののな。リイナの兄、レイソルから頼まれた事も、これで達成できるからね」

その発言に驚いて口をあんぐりと開けるシオンに、手をヒラヒラと振りながら、未だに話を続ける三人のもとへと向かうユフィー。

「あ、ユフィーさん。どうかしたんですか？」

チャキッ

「「ひいつ！」」

「…………ごほん。リイナ、あたし達はこの三人の旅に同行するわよ。そうした方が、あなたの『大好き』なお兄様の願いも叶うでしょう？」

近づいてくるユフィーに気づいたリイナが、未だに自らの私生活に踏み込んでくる一人を、剣を抜いて制する。その動きに、剣を向かれた二人は小さく悲鳴をあげて固まり、ユフィーは呆気にとられて無言になってしまった。

だが、すぐに咳払いをして氣を取り直したコフラーは、嫌味と皮肉を込めた言葉をリイナに投げ掛ける。

「あ、そりなんですか。やつぱり兄様はすごいですねー。コニコニまで分かっていて、私に話を持ちかけたんですねー。」

「……いや、それはあり得ないとと思うのだけれど……」

自らの言つた嫌味と皮肉が通じなかつたばかりか、自慢とも取れるリイナの言葉に、静かに突つ込んでしまうコフラー。

「では、そつと決まつたら即行動ですー。行きましょー。」

おー、と真っ風に手を掲げて宿屋から出ようとするリイナ。

だが、微妙に浮き立つてゐるリイナの肩を、シオンが掴んで止める。

「ちよつとちよつとリイナ。行くつてどーにぞ。」

「え？ 帝国領に行かないんですか？ それに、帝国領に行けば兄様に会えますからー。」

喜色満面。コニの言葉が一番似合つ笑顔でシオンを促すリイナ。だが、シオンは苦笑するばかりで、その手を離そつとはしなかつた。

「「「」めんね、リイナ。私たちはそう簡単に帝国領には戻れないの」

剣を向けられていた地獄から復活したカナが、申し訳なさそうにリイナに話す。

「え？ どうこいつ事ですか？」

「話にはあつたけど、シオンは拐われた帝国の王子。そして私は、その王子を拐つた誘拐犯なの」

頭を抱えながらやれやれと言つた風に話す力ナ。だが、リイナは良くわからないと言つた風に首をかしげている。

「…あなた達、帝国では指名手配されているの？」

「二人はお尋ね者だつたのかニヤー！」

「一人の考えに気づいたコフイーとクーが同時に声をあげ、クーにいたつては身を乗り出している。

「…クー。お尋ね者つて言つのはあんまりだよ…。あながち間違つて無いから困るんだけど…」

「…うん。コフイーちゃんが言つよつた感じだつたらまだ良かつたんだけどね…」

クーにお尋ね者と呼ばれた一人が落胆して肩を落とす。

軽く悲壮感が漂つ一人に、その言葉を言つたクーは慌てながら弁解する。

「…あ、許すし怒つてないけどさ。コフイーの想像通りだよ。最近

「…あ、許すし怒つてないけどさ。コフイーの想像通りだよ。最近

についてはあまり知らないけど、最初はそういうた指名手配はされたよ？もちろん、秘密裏にだけどね。でも、雇われた賞金稼ぎみたいな人とか、帝国騎士団の中でも僕の周りにいた人達とか、いろんな人達が来たね」

「確かに来たわね。やたら強かつたりして大変だったわ。特にあの剣を一本使う女、しつこすぎよ」

追われていた時期の事を思い出して悪態をつく力ナ。

その時の事は、シオンもあまり思い出したくないようで、一人そろつて目を伏させていた。

「へえ…なるほどです。だから一人は帝国領には足を踏み入れたくないんですね？」

「うん。前にも頑張つて入つてみたんだけど、僕の元護衛をやつてた騎士の人を見つかってね…」

「ちょっと…あれは見つかったなんてものじゃないでしょ！ いきなり元護衛対象、しかも王子に矢を射かけるなんてただの馬鹿よ！？」

一番嫌な話だつたのだろう。シオンに掴みかかるうかと言つ勢いで捲くし立てる力ナ。だが、その力ナをシオンは柔らかく退け、話を続ける。

「まあそつ言つ訳で、僕らは帝国領にすぐに向かうことは出来ない。ここHスカレルニアにはリイナがいるからいとして、それ以外だと僕らには待つと言つ選択肢しか……」

ドードー・ノンノン

「なんだ？」

爆発よ！ しかも魔法によるものだわ！」

シオンの言葉を遮り、爆音が酒場を支配する。そして、それに伴つた振動も。

「…まさか、もう攻めてきたって事は無いですよね…？」

リイナがありえないと言つたよつた言葉を出し、体を震わせている。

『それはシオンも同じだつた。自分の知る帝国に使える者達の性格上、ここまで話が進むとは思つてはいなかつたのだ。それに、クルトは『時の証』をまだ手に入れていない。いまだに送られてくる刺客がそれを物語つてゐるのだ。』

だが、シオノは失念していた。父はやると言つたら絶対にやる。そんな男だと誓つた。

「…くそ！ ごめん、皆！ ちよこと外を見てくる！」

「シオン！ 待ちなさい！ ああ、もう… あたし達も行くわよ！ クー、怯えてないで立ちなさい…」

その事に気づいたシオンは、急いで外の惨状を確かめに飛び出していく。自分の考える事が起きていない事を祈りながら。

そして、シオンを呆然と見送った四人だが、いち早く気を取り直したユフィーが三人を引き連れて酒場から飛び出した。

決意（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

発端 戦争の始まり

ド「ゴー——ン！——！

盛大な火柱が、クルメニアの街に上がる。

爆発系の炎の魔法によつて上がつた火柱は、街を焼き、人を焼いていく。そんな悲惨な光景を、二人の青年が眺めていた。

一人はまだ若く、幼い印象を受ける真紅の髪を腰まで伸ばし、背に弓を背負う長身瘦躯の青年。もう一人は、唇を卑劣に歪ませて焼かれしていく街を眺める、短い緑の髪を逆立てた青年。

その二人の青年は、お互に同じ服を着て後ろに控える兵隊らしき人の波に指示を出していた。

「やーやーやー。皆元気にやつてるかなー？ 今日は初めての人殺しだらうけど、楽しくやつていこーねー」

「…ピラー殿。兵の指揮を下げるようなことは言わないでいただきたいのですが」

陽気に物騒な事を言い放つ緑髪の青年を、真紅の髪を持つた青年がいさめるように呆れながら言つ。

だが、ピラーと呼ばれた青年はその陽気な雰囲気を一瞬で捨て去つてこう言つた。

「ああ！？ 僕の方が偉えんだから、口を挿まねえでいただけると

嬉しいんですけどねえ！　ええ！？　サーヴィー君！？

「（…また出たか）…申し訳ありません。ピラー参謀」

一気にガラが悪くなり、お世辞にも好意的とはいえない雰囲気に変わるピラー。顔もそれに合わせてか、かなり歪んでいた。

サーヴィーと呼ばれた青年は、真紅の髪を翻しながら頭をたれる。その心では悪態を吐きながら。

「うんうん、君はそれで良いんだよ。疑う必要なんかないよ？　君達はこの僕の駒なんだからやー」

「（…この腐つた下種が）…ピラー参謀、陛下よりの御達しの通り全て焼いてしまわれるのですか？」

「うん、当たり前だよー。この平和を偽りだと気づかせてあげるには壊すしかない。いやー、壊すつて楽しいよねー」

再び陽気な雰囲気をまとったピラーが、指をパチンと鳴らしながらサーヴィーの言葉を肯定する。

「煉獄の炎よ。その身に秘めたる力を爆発させよー。『パニッシュ・バースト煉獄の炸裂』

！」

ドガーンー！

ピラーから発せられた魔法は、地面から盛大な火柱を吹き上げさせる。石畳を焼き、それに巻き込まれた者は一瞬にして灰になつてその命を終わらせる。

その様を、ピラーは嘲笑をあげながら狂つたように眺めていた。

「ハハハハハハ！！！ 最高だ！ 実に最高じゃないか！！」

「……ピラー参謀。私は当初の予定通り東地区に向かいます」

「あ？ ああ、いってらっしゃーー」

「ハツ」

手を胸に置き、頭を垂れてその場から離れるサーヴィー。すると、一人の兵士がサーヴィーに話しかける。

「よいのですか？ 前線から離れてしまつても……」

「構わないさ。それに、あの男は私は好かん」

兵士と言葉を交わしながらピラーの元から離れていくサーヴィー。その間もピラーの起こす爆発の音は鳴り止まなかつた。

「よし！ 十人ほど私について来い！ 陛下のため、奮戦せよ！..」

「オオオオオ！..！」

「（…シオン殿下。あなたは今どいで何をしているんですか…）」

威勢よく指示を出すサーヴィーだったが、その心は全く別の所に向いていた。

「……」れは……

「……ひどい……」

「炎系の魔法ね……。術者はそんなに強くないわね。爆発の規模が小さすぎるわ」

「……なんでこんな事ができるんですか……」

「うー、鼻が痛いの……」

宿屋から飛び出した五人は、目の前に広がる街の変わり果てた姿にうな垂れていた。

シオンとカナは壊されていく街に息を呑み、コフィーはすぐさま使われた魔法についての分析を始める。リイナは壊れた瓦礫の中に見

つけた焼死体に、唇を噛み締める。クーは唯一の獣人族であるため、利きすぎる鼻を押さえてうずくまつていた。

「くそ！ こんな事が出来るのは、僕は一人しか知らない。…ブレイク・ピラー。帝国の作戦参謀だ」

瓦礫を殴り、やり場の無い怒りをぶつけるシオン。

その行為を止める者は誰もいなかつた。だれもがその気持ちだつたからだ。

「作戦参謀？ そんな大物がここに来ているの？」

シオンが呟いた単語に引っ掛かりを覚えたユフİYEーが質問を投げかける。黒い笑みを浮かべながらだが。

「うん、多分そうだと思うよ。一重人格みたいな人でね、戦闘になつたりちょっと頭にくるとすぐガラガラが悪くなるんだ。

まあ、普段も物騒な事しか言わない人だつたけど」

「そう。それならあたしに任せなさい。幸い火の魔導師のようだし、それならあたしが向かつた方が良いわ」

「… それもそうだね。なら、ピラーについては任せるよ。多分、千人規模で兵がいるかもしれないけど」

「ふふふ、最高じゃない。今からそぞくしてきたわ」

「武運を祈つてるよ。じゃあ、ここが集合場所という事で」

「分かつたわ。それじゃあね、シオン。あなたにも武運を祈つてゐるわ」

不敵な笑みを崩さぬまま、シオンたちと一緒に一時の別れを告げて踵を返すコフфиー。

去つていいくコフфиーの背中を見ながら、シオンたちは自分のなすべき事のために動きだす。

「…僕らが出来ることなんかが知れてるけど、でも、やるべきことはやひつ」

「なら、私は王宮に行つてきます。あそこなら兄様とも連絡が取れると思いまし、やつぱり、王國騎士団がどうなつてゐるのか気に入るんです」

リイナが手を上げ、自らの意見を主張する。兄は騎士団会議で出払つてゐるが、少しでも面識のある自分が行けば話しも楽だと判断したのだ。

「分かつた、それなら任せゆよ。クーもついていってくれるかな？少しでも人が多い方が安全だと思うんだ」

「分かつたよ。じゃあ、リイナ行くのニヤ」

「はい。では、御武運を」

なぜかクー主導で去つていいく一人を見つめながら、残されたシオンとカナはこれからについて話し合つた。

「さて、僕らだけ残つた訳だけど、さすがにこの状況じゃ住人の避難を手伝つのは無理そうだよね」

「ええ。でも、かと言つて何もしない訳には…！ シオン！ 下がつて！」

「え？」

ドスツ

二人の話を遮るように、一本の矢が二人の間に突き刺さる。その矢は綺麗に瓦礫に突き刺さつており、瓦礫にひびを入れてもいい事からかなりの技量の持ち主である事が伺える。

「ちつ、外したか。…お前達は一手に分かれて住人の捜索を始めろ。いいが、間違つても殺すな」

「ですが、それでは命令に…」

「くどいぞ！ 今はあのような男のことなど忘れる！」

「ハツ…」

その矢を放つたであろう人物が、連れて来た兵と思わしき集団に指示を飛ばす。苛立ちが募つているのか、兵達の疑問にも怒気のこもつた声で返している。

だが、シオンはその声に懐かしさを覚え、同時に困惑していた。

「…あの声、まさか…」

「ええ。シオンの思つてている通りで間違いないと思つわよ。なんでこんな所にあいつが…！」

カナもその声の主に気づいたのだろう。悪態を吐きながら前回苦汁を飲まされたことを思い出しているのか、悔しそうな顔をしている。

「ヤーの者達！隠れていないで出てきたらどうだー！」

「！隠れなきゃいけない状況を作ったのは誰のせいやー！」

「あ、カナ！」

発せられた言葉に憤慨したカナが瓦礫から飛び出していく。シオンはそのカナを見送るだけで、まだ外に出られなかつた。

田の前の現実を信じたくないがために。

「…貴殿は、カナ・コルセルニアか？ つ！ なら、ヤーには…」

「うぬわこーー あんたには色々とムカついてるんだから、一回黙れー！」

レストラン・ショーンを構え、真紅の髪を携えた男に突進していくカナ。その男は、カナの名を呼んだ後すぐに自らの考えに至り驚愕の表情を浮かべながらカナの神速の突きを避ける。

「くつー！ 殿下が…シオン殿下がいらっしゃるとはいつのまに…？」

「ええい！一回黙れって、言つてるでしょ！」

完全に意識がカナから外れている男に、カナは一気に槍を振り回す。遠心力を利用して爆発的に加速度をつけた穂先は、上段から男を襲う。

「くそつ！ならば私が戦う理由は！」

「あんたには無くとも、私にはあるのよ！」

カナの一撃を辛うじて避けた男は、後退しながら矢を放つ。その矢の本数は、六。並の人間が一息に放てる矢の量では無い。

だが、その矢の雨をカナは矢を一振りして全て弾き落とす。槍のリーチがなせる技に、男は舌打ちをしながら矢を放つ。

その数はさらに増えるが、カナも槍を円状に回転させて一切の矢を後ろへと通さない。

「ちつ。やはり分が悪いか…」

「…だー！こんな弾幕、私には抜けられないわよ！せめて一瞬でもいいから途切れてくれないかな…」

「だが…！」

男が弾幕を張るのをやめ、一本の矢に力を籠め始める。その隙を見逃さないカナではなく、槍の回転はそのままに男へと突進していく。だが、その二人の攻撃が放たれる事は無かつた。

二人の間の地面が黒く変質して、ゆっくりと削り取られていく。元地面であつた真つ黒な物体は、小さな球体となつて周りのものを巻き込んで消滅する。

「これは…！」

「ちょっとシオン！ 邪魔しないでよ…」

「邪魔ぐら~にするぞ。…もう止めてくれ、二人とも」

「シオン殿下！ なぜあなた様がこのような所に！？」

二人の間の地面を文字通り消し去つた技を見て、男はまさかという顔をし、力ナは邪魔が入つたと怒つている。

だが、その技『ブラック・ーム黒球闇』を放つた本人であるシオンは、悲しそうな顔をしながら瓦礫の中から現れた。

シオンが現れた事により、男は驚愕の表情を浮かべて声を上げる。その男の言葉に、シオンはさらに悲しそうな表情を濃くしながら言う。

「それは僕の台詞だよ… トラヴァス、なぜ君がこんな所にいる。帝国騎士団である君が…」

「… 帝国騎士だからです。我らは王の手足であり唯一の剣。王の命令は絶対です」

「そんな！ 父上がそんな事…！」

「これは本当です。… フォーゲルノート帝国は、エスカレルニア王国に宣戦布告します」

信じられないと言つた顔をするシオンに対し、トラヴァース・サーヴィーは静かに、しかしきつぱりと語る。

一つの大陸を巻き込む戦争の、始まりの宣言を。

発端 戦争の始まり（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

ユフイーの怒り

「さて、と。あたしに任せると書いて出てきたのはいいけれど、場所の特定が難しいわね…」

四人と別れたユフイーは荒れた街を歩いていた。

所々陥没し、燃えている石畳を確認しながら慎重に歩いていく。その際に、微力ながら残る魔力を探しながら、相手の技量を図つていた。

「…ふーん。シオンの言った事は本当のようね。ただの雑魚ではなさそうだわ」

その魔力に残る僅かばかりの術者の思念に、ユフイーは素直に感心する。

普通、魔法は術者の魔力と精神力によって発動する。それはつまり、どんなに強力な魔力を持つっていても、それに見合う精神がないと魔法は発動しないのだ。その逆もまた然りで、精神力が強く出た時、つまりは死などに直面した時は強力な魔法が発動するとも言われている。

その事から、ユフイーはこの術を発動したと思われるブレイク・ピラーと言う男に、内心舌を巻いていたのだ。

「ま、とは言つてもそこまで苦戦するような相手には……いたわね」

そう言つたユフイーの前には、数百人ほどの兵を連れた緑の逆立つ

た髪の男が、兵に指示を飛ばしながら自らの炎魔法で街を焼き払っていた。

「さー、みなさん！ 陛下のため、そして自分たちのために頑張つて戦つてくださいよ！？」

「オオオオオ――――――！」

「（…何よあれ？ 馬鹿なの？ 腐つてているとしか言ひようが無いわね）」

かなり辛辣な言葉を、胸の内だがはき捨てるよつに言ひコフイー。

だが、男達はユフィーの事に気づく事無く破壊を続ける。その中には時折現れる住人の叫び声は、兵達の声や魔法の衝撃によつてかき消されてしまつ。

その同じ人間とは思えないただの殺戮に、ユフィーは静かに切れていた。そして、その怒りのままに体の魔力を彼女の愛用の長杖『スターレイン』へと流し込んでいく。

「さあ！ そろそろここも大詰めです！ 早く壊して次に行きま…ん？」

意気揚々と次の魔法を発動し、新たな殺戮を求めて指示を出そうとしていた男はようやく気づく。

自らの魔法により燃えていた街が、自分では無い他人の魔力により凍つっていく事に。

「……ふふふ。」こんなに怒るのは何時以来かしらね……

真っ黒な笑みを浮かべながら、ゆっくりと一歩ずつ地面を踏みしめるよつに歩くコフイー。

その踏みしめられる地面は、コフイーの魔力によつて少しづつ侵食されるよつに凍つっていく。

「な、何者だ、貴様！」

戦慄さえ覚えるコフイーの雰囲気に、ブレイクは体を震わせながらも辛うじて言葉を搾り出す。

だが、ブレイクの震える言葉などコフイーの耳には入りず、ただその距離を縮めていく。

「ええい！ 閻夜に灯る、蝶の揺らめきよ。我が前の敵を焼き飛ばせ！』『灯火の蝶』！」

眼前に迫る脅威を排除しようと、内に染まる恐怖といつ感情のままに魔法を発動するブレイク。その魔法は、巨大な一匹の炎の蝶となり、コフイーへとその死の羽を伸ばす。

コフイーは自らを焼かんとする蝶の炎の羽を、ただまっすぐに見つめて自らも魔法を発動する。

「凍つ世界に住まう、唯一の絶対者。氷の女王よ、我が呼びかけに答え、その冷たき体で我が脅威を抱け。『氷の抱擁』」

コフイーが炎の蝶に向かつて構えたスター・レインの宝玉部分が、一

際眩い光を放つ。そして、その光とユフイーの呪文に呼応する様に魔法が発動する。

その魔法から生まれたものは、巨大な吹雪。ユフイーの怒りを表すかのように吹雪は荒れ狂い、炎の蝶を包み込んでいく。

猛威を振るう吹雪が収まつた後には炎の蝶は跡形もなくなつており、その後には氷の銀世界が生まれていた。

「な、何だと……！……てんめえ、よおくもやつてくれたなあ……！」

目の前に広がる銀世界に、ブレイクは一度信じられないといった顔をするが、その次の瞬間にはガラの悪い声を上げてユフイーを睨んでいた。

「聞いた通りの性格ね。でも、一重人格みたいな人じやなくて、もうそのまんまでいいじやない」

「聞いた通りだあ？ んなもん誰に聞いたあ！」

シオンからの情報通りの反応をしたブレイクに、ユフイーは半ば呆れて肩をすくめる。だが、その行動が瘤に障つたらしく、怒りをあらわに体に魔力をまとわせるブレイク。

ブレイクがまとつた魔力を見て、ユフイーは余裕の笑みを浮かべて鼻を鳴らしながら手招きする。

「ふん。あんたが知る必要は無いわ。いいからかかつて来なさい、軽く捻つてあげるから」

「言わせておけばあ……」

ユフィーの挑発に乗ったブレイクは、拳を固く握り締めて突進していく。握り締めた手を高く振り上げ、突進の威力そのままにユフィーに向かつて振り下ろす。

体格差は歴然。普通に考えれば、ユフィーがブレイクに勝てるわけが無い。だが、ユフィーは余裕の笑みを崩さずに迫つてくるブレイクを見つめていた。

「さあ……あなたの出番よ。契約の名の下に具現せよ。我が前に立つ敵を打ち払え。その体に秘めし、極寒の吹雪の冷たさを持つて！」

ユフィーの口から発せられたのは召喚呪文。召喚魔導師であるユフィーの真骨頂の技であり、一番の魔力を使う技だ。

右手の中指にはめられた指輪『ティザイア』が輝き、小さい吹雪がその指輪を中心に巻き起こる。そして、その中に巻き起こる吹雪から、一匹の魔物が現れた。

「『スノーハルピュイア』だとお！？ てめえ、召喚魔導師か！」

ユフィーが召喚した魔物を見て、ブレイクが驚きの声を上げる。

ユフィーが召喚した魔物は、一般的にスノーハルピュイアと呼ばれる人鳥型の魔物だ。操る属性によつて冠する名前が変わり、この魔物はスノーの名の通り氷を操る魔物である。

召喚されたスノーハルピュイアは、一度大きく背伸びをするように体を伸ばすと、召喚者であるユフィーに向かつて体の半分程を占

める翼を折りたたんで礼をする。

「… わて、今からあなたにしてもう一つ事は、人を殺して食いつ事よ。出来るわね？」

まるで自らの子供に語りかけているような聲音で命令するコフィー。言葉の内容としては中々に物騒なものであつたが、その命令にスノーハルピュイアは「クリと領き、ブレイクへと向き直つた。

「はつ！ いくら魔物が相手だらうが、俺の炎で焼き尽くしてやらあ！」

翼を広げて威嚇するよつに飛び上がる敵を見て、ブレイクは魔力を練り上げていく。だが、その魔力が魔法に変わつて発動する事は無かつた。

「誰があの子だけに戦わせると言つたの？ あんたは今この段階で二対一なのよ」

「は？」

ピキピキピキ…

「んなあ！ お、俺の腕があ！ あ、足もあ…！」

練り上げた魔力の上から覆いかぶさるよつに、ブレイクの右腕と左足が凍つっていく。多大な炎の魔力で熱を持つ自らの体が凍つっていく事に、ブレイクは恐怖のあまり叫んでいた。

「ど、どいつ言う事だ！？ なんで俺の腕が凍つてるんだよお…」

「さあ？ あんたは知らなくてもいい事よ。いえ、一生かかっても分からぬ事でしょ？」

「ぐ、くそがー！ おい、お前らー。」いつを始末しろ！」

ゆつくりとだが着実に凍つっていく自らの体を見て発狂しかけるブレイクに、ユフイーは冷たく言葉を言い放つ。だが、逆にその言葉で冷静になれたのか、ブレイクは情けなくではあるが周りの兵達に助けを求めるように指示を飛ばす。

しかし、その指示が兵達に届くことは一度と無かつた。

グサッ

「無駄よ。だつて、今最後の一人が死んだから」

ブレイクが見たのは、部下であつた兵の胸にスノーハルピュイアの足の鉤爪が刺さつた瞬間だつた。そして、スノーハルピュイアはそのまま胸から心臓を抉り出してそれを喰らつ。

その様を見たブレイクは、他の者は本当にいなかと辺りを見渡す。ユフイーの静かに諭す言葉も耳に入らず、銀世界にアクセントとして残る部下の血痕を見つめていた。

「ハハハハハハー！ 面白えー！ 面白えじやねえかあー！」

その惨状を見とめ、顔を上げて焦点の合つていない瞳を彷徨わせて、狂つたよつに笑い出すブレイク。

それをいぶかしんだユフィーが眉を顰めてブレイクを見つめていると、ブレイクから十発ほどの炎弾が飛んで来る。咄嗟に魔法障壁を張つて防御すると、煙の晴れた先にはブレイクが体を揺らしながら立つていた。

「…ちつ…まあいいわ。じつくりあたしが料理してあげようと思つてたけど、じつやああなたがご指名のよつよ。ハル」

体をユラコラと揺らしながら立つブレイクの目は、スノーハルピュイアへと向けられていた。部下の命を奪つた、憎悪の対象に。

その視線に気づいたユフィーは少々残念そうにしながらも、ハルと言つ愛称で呼んだスノーハルピュイアに命令を下す。

「…喰らいなさい。骨の一片たりとも残さず！」

ユフィーの命令を受けたハルは、ブレイクに向かつて飛び立つていく。べつとりと血がついた爪を振りかぶり、ブレイクに向かつてその鉤爪を振り下ろす。

その振り下ろされる死をはらんだ鉤爪を、凍り行く体を使って防ぐブレイク。だが、凍りきつた体では鉤爪を受け止めることが出来はしない。無残にも碎け散る自らの腕を見て、ブレイクはその狂喜の表情を深めていく。

「ハハハハ！ もつと、もつとだ！ どうせお前達は知る事になるのだ！ 世界の終わりを！ 真世界へと至る扉の開門を！」

凍りきつていない肩口や首、至る所をハルに蹂躪されながら笑うブレイク。その張り付いた笑みのまま、高々に宣言していく。

グシャツ

だが、その宣言はハルの鉤爪によつてかき壊された。なぜなら、頭をぐしゃりと潰され首無しとなつた瞬間、その体が完全に凍りきつて奇妙な氷の像となつたからだ。

爪についた血を舐め取つてゐるハルの隣に立つたユフイーは、その奇妙な像に触れて一言。

「…爆ぜよ」

そのたつた一言で、氷の像は呆氣なく弾ける。キラキラと舞う氷の欠片に包まれるユフイーの姿は美しく、それでいておぞましかつた。

ハイーの怒り（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

「はあ、はあ、はあ。クーさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫ニヤ。それより、リイナこそ大丈夫？　かなり息が上がつてるけど…」

「うー、こんなに遠いとは思つてなかつたんですねう」

シオン達と別れた場所ほどは壊れていらない街を、リイナとクーが走る。一人が向かっているのは城。この街の惨状の報告、あるいは確認するためだ。

そこにリイナとクーが向かっているのだが、やはり鍛えていると言つても獣人族の方が基礎体力は上である。先ほどから大分息があがつてしまっているリイナに対し、クーはさほど堪えていないようでリイナに併走しながら心配そうに声をかけていた。

そのクーの心配する声に、リイナは半ば泣きそうな声で走りながら答えていた。

「そう言えればリイナ、城に行つても当てなんかあるの？」

「はあ…。はい。一応、前に兄様について行つた時に好くしてもらつた首都の近衛隊の方がいるはずです。近衛隊は騎士団と違つて首都から動く事はまず絶対に無いですから」

クーの質問に答えるために、一度息を整えてからその答えを一気に喋るリイナ。

首都に住んでいたクーにとつて、近衛隊の存在といつものほんは大きかつた。なぜなら、近衛隊といつものほんにでもいるよな治安維持のために作られた集団で、元商人であつたクーは何度かお世話になつてゐるのである。

「ねえ、リイナ。もしかして、その好くしてもらつた人つて狐耳の獸人族の人…なのがニヤ？」

「え？ そうですけど…。クーさん、良く分かりましたね」

「うん。近衛隊の人だつたら、よく覚えてるよ。……ジユルリ……」

クーの口から発せられた意外な発言に、リイナは驚いた顔をして反応する。だが、クーはその理由をつけてその言葉に平然と答える。

しかし、そこまで言つた後クーはリイナに見えないよつこ、盛大に溢れた涎を拭き取つていた。その行為を、リイナは走ることに集中していた為に見る事は無かつた。

「あ、クーさん。見えてきましたよ！」

「…やつぱり、いつ見てもおつき」ニヤ

リイナが指差したのは、クルメニアの中心に建つエスカレルニア城。質素と豪華さが混ざりあつたなんとも不思議な形の城である。

その城を見上げながらクーはため息をついていた。まさか、こんな形で城に入ることなど全く予想していなかつたからである。

「取り合えず、城の中に入りましょう。そこで色々と話を聞けるはずです」

「分かったニヤ。…？」リイナ、門の前に人が集まってるんだけど

…」

「え？ あ、あれは近衛隊の方々ですね。でも、何あんな所に…」

一旦は了承したクーが見つけたのは、城に入る門の前で集まっている集団だった。

その集団は、皆一様に同じような服装をしており、腰についた剣も背におう槍も同じような装飾で纏められていた。

「…ん？ リイナ様！ 『無事でしたか！』

「あ、ナリアさん！ そちらこそ『無事で何よりです！』

その集団に混ざっていた一人の女性が、リイナ達に気づいて駆け寄つてくる。

落ち着いた雰囲気のある女性で、コラコラと動く尻尾と頭にある狐の耳が獣人族であることを証明している。

リイナは駆け寄つてくる女性の姿を見つけると、元気よく手を振りながらその女性を迎えた。

「ええ。あなたの兄君からお話を伺つてありました。妹が旅に出るだろうから、何かあればよろしくと。…まさか、こんな形でお会いするとは夢にも思いませんでしたが…」

「兄様がそんな事を…。あ、ナリアさん。首都の状況はどうなつて
いるか教えてもらえますか？あと、できれば兄様と連絡が取れ
ばいいのですが…」

ナリアと呼ばれた狐耳の獣人族の女性は、リイナの言葉に悔しそう
に首を振る。

その仕草を見て、リイナとクーは最悪の事態を予想して目を伏せて
しまった。

「…首都クルメニアはほぼ半壊状態です。街の東部分が特に被害が
多く、死傷者もこちらでは正確に把握しきれていません。それに加
え、連絡用の魔法水晶も内部の者によつて破壊され、騎士団と連絡
がとれずじまいです」

「そんな…！ あ、王は？ シリアナ王は無事なんですか？」

少しでもいい報告を期待していただけに、その報告の悲惨さにリイ
ナは軽く悲鳴をあげてしまつ。

だが、直ぐに気を取り直して次の質問を投げ掛ける。

「我らが王は無事です。宣戦布告をした裏切りの側近に命を狙われ
ましたが、流石は武王と呼ばれるお方です。返り討ちにしたと笑つ
ておられましたよ」

「そうですか…」

「ちよつと待つて。宣戦布告をした裏切りの側近つて、どう言つ事

「ニヤ？」

曖昧な関係ではあったが、使えていた主が無事だと言つことを知ると、リイナは胸を撫で下ろした。

だが、その隣で話を聞いていたクーは話を遮るように疑問をぶつける。

「言葉通りの意味になります。まず、我がエスカレルニア王国はフオーゲルノート帝国と戦争状態になりました」

「やつぱり、シオンさんが言つた事は正しかったんだ」

「やつなるニヤ。でも、言葉通りの意味と言つことは、フオーゲルノートの息がかかっていた者がいたと言つことになるけど…」

シオンの言葉を思いだし、その言葉の真意を噛み締めるリイナとクー。

その中にあつた言葉から、一つの予想に至つたクーは独り言のよつに呟いていく。

「いえ、少しそれは違います。王の話によると、返り討ちにした側近が言つた言葉の中に、ルナースクルメアと言つての信仰集団の名前が出てきたと仰つていましたから」

クーの独り言を否定するように言葉を口にしたナリアだったが、リイナとクーは逆に顔をひきつらせた。

「ルナースクルメア…。エスカレルニアにも本当にいたんですね…」

「でも、宣戦布告をしたって事は、フォーゲルノートと戦つ事になるんでしょう？」

「はい、その通りです。王もそのつもりだと、我ら近衛隊や騎士団に命じておりました。ええと…」

「…？ あ、クーディー二ヤ」

ナリアが急に言い淀んだことをいぶかしんだクーディーだが、紹介をしていないことに気づいて自分の名前を名乗る。

その名前を受け取ったナリアは、佇まいをきちんと直して敬礼する。

「私は、クルメニア近衛隊所属のナリアとります。以後、お見知りおきを」

「わかつた二ヤ」

「なら、ナリアさん。私達にも手伝える」とつてないですか？」

今まで顔を伏せていたリイナが、ナリアにそんな事を提案する。その思わず提案に、ナリアは驚きながらも喜びの声をあげる。

「よいのですか？ 態々リイナ様のお手を煩わせても…」

「構わないですよ。…今こうやって話している時にも、被害は増えているんです。それに、困っている人を見捨てるなんて、兄様に怒られてしまいます！」

小さく拳を握りながら、熱弁を振るリィナ。

そんなリィナの様子に、申し訳なさそうに下を向いていたナリアは、少し呆れたようにため息をついた。

「ふつ。やはりリィナ様は兄君を深く敬愛していらっしゃる。…分かりました。今隊長に取り次ぎますので、少々お待ちください」

そう言い残すと、未だ門の前に集まっていた近衛隊の仲間の下へ駆けていくナリア。

駆けていくナリアの背を見つめながら、クーは未だに拳を握り締めているリィナに向かって言葉を紡ぐ。

「リィナって、本当にお兄さんが好きなんだねー」

「はー！ だつて、越えたい壁、憧れの存在ですからー！」

「ふーん。そんな自慢のお兄さんだったら一度会ってみたいニャーー

一度は呆れていたクーだが、口もとに手を当てながらまだ見ぬリィナの兄の人物像を思い浮かべる。そのクーに質問されたリィナは未だに拳を握つてその兄の事を思い浮かべていた。

合流へ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

一時の敗北

「…いいですわねえ、平和そつで…」

エスカレルニア城の尖塔の突端に、一人の女性が薄く笑いながら佇む。口元は笑っているが、冷ややかな目でその眼下にいる人間、リイナやクー、近衛隊の面々を見下ろしていた。

年はナリアと同じかそれより少し上くらいであろうか。銀縁の大きな眼鏡が印象的な、独特の青みがかつた衣装に身を包んだ女性である。

その女性が紡いだ言葉は、普通では絶対に出でこないような言葉である。だれがこの燃え盛る街を見て平和などと言えるのだろうか。

「…だからこそ、気にくわないのでわ」

そう口にしながら、女性は両手を自らの眼前へと持ち上げていく。そして、その両手の先に魔力を込めていく。

込められた魔力は、女性の両手で巨大な水の渦となつてうねる。水の巻きと言つてもいいほどの圧力を、女性は冷ややかな目で見つめながら、両手をゆっくりと下ろしていく。

ナリアが向かう、近衛隊の集まる円の中心に向かって。

「永久に流れる水の調よ、^{ペイス・トルナード}我が前に見える脅威を、その清らかな身で洗い流せ。『水の奔流』」

唱えられた呪文と共に、両手にあつた水の竜巻が眼下に向かつて落下を始める。その竜巻は、膨大な質量を保つたまま猛然と突き進んでいく。

そして、眼下にいた近衛隊の面々を巻き込んで地面へと衝突した。

ズガーン！！

「キャアッ！」

「つ！ ナリアさん！」

近衛隊の下へと向かつていたナリアは、目の前で起こつた水の竜巻の地面への衝突の衝撃をまともに受け、体を吹き飛ばされてしまつ。爆風によつて吹き飛ばされる様を見たリイナとクーは、『ロロロロ』と人形のよつに転がつたナリアの下へ駆け寄る。

「しつかりするニヤ！」

「かはつ！ い、いつたい何が……つ！」

駆け寄つたクーが、ナリアに声をかけながらその体を支える。その隣にきたリイナは、ナリアを支えるよつにその手を差し出す。

クー やリイナに手伝つてもらひながらだが、痛めた体に鞭打つて起き上がつたナリアは、眼前に広がる惨状に息を呑む。

三人の目に広がるのは、圧倒的な水の質量に成す術もなく破壊され

た石畳と、近衛隊の骸達。未だに水零が滴るその体は、様々な角度に折れ曲がっており、誰もが見る目を逸らす光景だった。

「そ、そんな……！ 隊の皆が……？」

「ナリア！ しつかりするニヤー！」

「……なんで、こんな事……つ！ 鎮さん、上です！」

その光景を目の当たりにしたナリアは、顔に手を当てて蹲ってしまった。リイナとクーもその惨状を目の当たりにしたせいか、悔しそうな顔をして唇を噛み締めていた。

だが、リイナは頭上で輝いた光を見逃さなかった。そして、その光の方角を指差して声を上げる。

スタッ

その光の方から、一人の女性が飛び降りてくる。リイナが指差したのはかなり上の方なのだが、そんな事を感じさせない軽々とした着地で地面へと降り立つた。

「お初にお目にかかりますわ。私の名前は、ソリアナ・レッドフィールド。フォーゲルノート帝国の国王親衛隊をやつておりますの」

仰々しく礼をしながら自らの名前と役職を口にする蒼銀の髪を持つた女性。銀縁の大きな眼鏡に手を当てながら、リイナ達を威圧するように立っている。

その威圧感に気圧されていたリイナ達だが、大きく息を吸い込

んでから意識を保つみづて言こ返す。

「… そうですか。でも、あなたの名前なんてどうでもいいんです。… いの惨状を いえ、あの魔法を使つたのは、あなたですか？」

「そうですね！ 私の水魔法なら、あのような下賤な輩など一撃ですわ！」

「……不意打ちだったせにゃ……」

リイナの質問に胸を張つて答えるソリアナ。動きに合わせて揺れる髪が光を反射し、なんとも言えない雰囲気を醸し出していたが、リイナ達にとつてはどうでもいい事だった。

その証拠に、クーはぼそりと誰にも聞こえないような小声で囁まれ口を叩いていた。

「まあ？ あなた達は少しほお強こよつですでの、心優しい私が生かして差し上げたのですわ」

顔の前で手を翻すようにひらひらとさせながら、挑発するよつじ言うソリアナ。

安っぽい挑発なのだが、今のナリアにその言葉は充分に癪に障るものだった。

チャキッ

「… 生かしておいた？ どうこつ意味よ？」

剣を抜き、まっすぐソリアナに剣先を向けるナリア。近衛隊として訓練を重ねる彼女にとつては、剣をまっすぐ構えることなど造作もない事なのだが、今の心境を表すかのようにその剣先を小刻みに揺れていた。

「ふん、言葉通りの意味ですね。でも、あなたと隣にいる獣人が組んでも、あの銀の髪の娘には勝てないでしょっけど」

向けられる剣先にも動じず、ソリアナは嘲笑うかのように二人を順番に指差していく。そして、その指先はリイナに向けられたまま止まる。

その向けられる指と睨みつけるように、リイナはソリアナを見つめていた。

「…私はそんな自分が強いなんて思つた事は無いですよ。だから、そんな言い方は心外です」

「そうニヤー！ 大体、なんでリイナがクーたちより強いって分かるのニヤ？」

少し論点がずれている気がするが、クーが威勢よくソリアナの言葉に噛み付く。それに合わせて、一人はナリアに留つように自らの得物をソリアナへと向けた。

リイナは片刃の独特的の形をした『セントクルセイダーズ』を上段に構え、クーは自らの拳を手甲で包んで右拳を突き出すようにして構える。

その行動を見たソリアナは、自らも腰から豪勢な装飾の施された短

杖を取り出して構える。

「いいでしょ、お相手してさしあげますわー。」

「ふん！ 三対一の状況を良く見てから言いいなさい！ リイナ様、クー！ 行きますよ！？」

「はい！ いつでも！」

「任せのーヤー！」

ソリアナの開戦宣言とも取れる言葉を受け、まず始めにナリアが啖呵を切るように言葉を口にする。そして、リイナとクーもその言葉に続くようにソリアナに向かって走り出した。

「清らかな水よ。その身を鋭利な刃とし、我が敵を切り裂け！
水の尖刃^{ウォーター・ブレード}！」

「我が友に舞い降り、その身に宿れ。鋭利な矛と強靭な盾よ！
剣と盾^{ブレード・オブ・ブレード}！」

ソリアナから放たれた魔法は、空間に鋭利な水の刃を出現させ、その刃は寸分違わずリイナとクーを狙う。しかし、その刃をリイナは剣を使つていなし、クーは身軽な体を活かして軽々と避けていく。

その行動を見つめていたナリアは、自らの得意分野である補助魔法をリイナとクーにかける。淡い赤と淡い青の二つの光がナリアから放たれ、リイナとクーを守るようにその体に宿る。

そして、淡い赤の光はそれぞれの武器に纏われ、淡い青の光は体全

体を覆うように広がった。

「なかなかやりますわね。ですが、我が水の尖刃は無数に生産できませんよ！」

ヒュンヒュンヒュン…

ソリアナの言葉通り、水の刃はなくなるどころかその数を増し、至る所からリイナたちに迫る。ナリアの補助魔法で強化された身であつても、無数の水刃を裁ききるのは不可能なのだ。

何とか踏ん張る三人だが、如何せん相手との分が悪い。三対一と構図的にはリイナたちが有利だが、相手は生粋の魔導師で、リイナたちは完全な前衛が一人と補助魔導師が一人。

魔物討伐にはもってこいな組み合わせだが、相手は人間。知能は波の魔物よりはるかに高いのだ。

そのために、ソリアナは自分が完全に後衛に下がり、弱い魔法でも長時間維持できる魔法でなぶり殺す手段をとつたのだ。

「くそつ。」そのままじや、近づけないです！ なにか、何か手は…」

「リイナ、魔法は使えないのかニヤ？ 宿屋で確かそんな事言つてなかつたつけ？」

お互い背を合わせて、飛来する水の刃を迎撃している最中、クーがリイナにそう質問する。

いかにも妙案と言えるのだが、リイナはクーのそんな淡い期待を見

事に裏切った。

「…私は剣士の家系と言つ事で、生まれた時に聖靈の加護を受けれないんです。魔力を持つて生まれるなんて、思いもしないですか。それに、コントロールもままならないので、下手したら爆発して軽くこの場が吹き飛ぶかも…」

「…ヤー!? そ、それは本当かいヤー?」

リイナの思ひもよらない質問の答えに、クーはかなり慌ててしまつ。クーがリイナの話を聞いてあたふたしていると、後ろで控えていたナリアが苦笑交じりにやつってきた。

「リイナ様の言つ通りよクー。リイナ様は齡六歳にして、島を一つ消すほどの魔力を持つていたんだから」

「わー! そ、そんな事はこんな戦闘中に言つことじやないですからー!」

リイナの言つ通り、今は戦闘中である。朗らかと言つていいのかは分からぬが、こんな話をしているのは全くもつておかしい。そして、そんな話をしている間にも水の刃を的確に迎撃している所を見ると、戦闘中だと言つ事は忘れてしまつだらう。

だが、その態度はソリアナの逆鱗に触れてしまつことになる。

「あ、あなた達…! 私を馬鹿にしていますのー!?」

お前の攻撃など恐ぬるに足らぬと言わんばかりに、話をしながら

ソリアナの魔法を迎撃する三人に、ソリアナは拳を握り締める。

「…いいですわ。これ以上侮辱をなさるのなら、この技で終わりにして差し上げます！『水の奔流』！」

威勢よく切られた啖呵と共に掲げられた短杖から、巨大な水の竜巻が現れる。その魔法を見たリイナ達は、見覚えのある水の竜巻の出現に警戒の色を強めた。

だが、魔法はもう完成して術者の手から離れている。それを止める術は三人の内、誰も持つていなかつた。

「キヤア！」

「ニヤア！」

「くつ！」

水の刃と言つ小さなものは防ぐ事が出来ても、巨大な水の竜巻を防ぐ事は到底出来はしない。そのため、リイナ達三人はその魔法をまともに食らってしまう。

竜巻に呑まれた三人は、その体をぐるぐると翻弄されながら吹き飛んだ。

「はつ！ 呆氣ない終わりでしたわね。所詮この程度の敵は私の相手ではなかつたと言つ事ですわ！」

腰に手を当てて高笑いするソリアナ。だが、この時の彼女は忘れていた。彼女が吹き飛ばした敵の中に、補助魔導師という自らの命を

削つても仲間のために努力する、そんな者がいたと言つじとを。

一時の敗北（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

「……。あれ、私、生きてる……？」

ソリアナの魔法によつて吹き飛ばされたリイナは、一緒に巻き込まれて吹き飛んだ瓦礫の中で田を覚ました。

目立つた外傷は無く、あるとすれば軽い擦り傷とぐるぐるとかき回された時に引き起こされた吐き気程度。ありえない傷の無さにリイナが驚いていると、体が一瞬淡い青の光に包まれる。

「……」これはナリアさんの補助呪文ですね……。あ、そういうえばクーカンは！？ ナリアさんも！ いるんですか？」

ほんの一瞬光つた体の状況を見てみると、その補助呪文がナリアがかけたものだと判明して納得するリイナ。そして、その事が分かつた瞬間、一緒に吹き飛ばされた一人の名前を呼ぶ。

「……ん？ あれって、尻尾ですかね？」

一人の仲間を探して瓦礫の中を彷徨つていたリイナが見つけたのは、特徴的な傷がある青暗い色の尻尾だった。

瓦礫の上にペタリと張り付いたように伸びている尻尾を見て、リイナは名案とばかりにある事を思いつく。

分からぬなら引つ張つてみればいいんです、と。

「えいっ！」

グイッ

「「「」ヤーーーー！ 痛い、痛い「」ヤーーーー！」

リイナの狙い通り？ クーが悲鳴をあげながら瓦礫の中から引っ張りあげられる。

「あ、やっぱりクーさんの尻尾でしたか。見つかってよかったです」

「リ、リイナは悪魔か「」ヤ？」

探し人の一人が現れた事に、リイナは単純に嬉しそうに笑みを浮かべてはしゃぐ。

だが、自らの尻尾をおもいつきり引かれて、さらに瓦礫の中から引きずり出されたクーは、尻尾の生え際を押されて涙目になっていた。

「「」ヤーーー。引っ」」抜けるかと思つほど痛かった「」ヤ……」

「あ、そういうえばクーさん。ナリアさん見なかつたですか？」

「ナリア？ うーん、一緒に飛ばされた事までは覚えてるんだけど

…」

「私なら」」」ですよ」

未だにクーは尻尾を押されたままだが、残りの探し人の事を一人が心配していると、その探し人の方から現れた。

「あ、ナリアさん！ つて、腕を怪我してるじゃないですか！」

現れたナリアは一人よりも怪我がひどく、特に支えられている右腕からはかなりの血が流れていた。

その怪我を見たリイナは、血相を変えてナリアへと駆け寄る。

「なに、リイナ様が心配するほどものではありません。骨以上はありませんし、いつすれば…」

心配するリイナを落ち着かせるように笑いかけると、治癒系の補助呪文を自らの体にかけるナリア。

薄く光る白い光は、ナリアの腕や特に怪我がひどい箇所を巡つては消えていく。

「…『ペイン・ブロック痛覚遮断』の魔法をかけただけですので、治つてはいませんが戦えますよ」

「でも、戦えるって言つても、あの人には勝てないですよ。組み合わせが悪すぎます」

「そうだニーヤ。大分飛ばされちゃつたし、水を被つたせいで鼻もあんまり利かないニーヤ…」

腕をぐるぐると回して大丈夫だと言い張るナリアだが、リイナとクーはそれぞれの理由をつけて言い淀んでしまう。

リイナの理由は組み合せが悪い事。確かに、もう一度挑んでも対

処法がない今の段階では、また魔法をくらうだけである。

クーとしては、単純に相手の位置が分からないと言つ理由なのだが、鼻が利く獣人族にとつては大きな理由であり、それはナリアにも分かっているはずだ。

だが、ナリアは毅然とした態度で一人の意見を思わぬ言葉で否定した。

「…それは分かっています。ですがリイナ様、あなたほどの魔力の持ち主であれば、勝てるかもしれません」

ナリアのその大胆な発言に、当の本人であるリイナよりクーの方が大きく反応していた。

「え？ それはどう言つ事ニヤ、ナリア。リイナはもし暴発したらここら付近が軽く吹き飛ぶんでしょ？」

「確かにクーの言つ通りなんだけどね。でも、私に考えがあるの。リイナ様の魔力を、私が制御します」

「私の魔力を？ ダメです！ そんな無茶をするなんて…！」

クーの懸念を他所に、ナリアはキッパリと自分の考えを明かす。

ナリアのその大胆な考えに、リイナは拒否の声をあげる。

「いくらナリアさんが補助魔導師だと言つても、他人の魔力を制御するなんて危険すぎます！」

リイナの言つ通り、ナリアの考えはかなり危険なものだ。

魔力は人それぞれ質も量も全く違う。加護を受けた場所や、その加護の儀式の形式からも魔力の質は変化してしまうのだ。

そのため、魔力の受け渡しによる魔力の回復や、他人の魔力を制御して魔法を放つ事など不可能なのである。

だが、ナリアは自分の事を心配するリイナに対し、自らの考えを話し始める。

「それができるはずなんです。もちろん、リイナ様にも手伝つてもらわなければなりませんが…」

「手伝つて… 今の私には魔力の制御なんて…」

肩をつかみ、問い合わせるような雰囲気でリイナに話すナリアだが、当のリイナ本人は自信無さげに俯くばかりだった。

そんなリイナを見るナリアは、構わず話を進める。

「厳密に言えば、制御するのではありません。リイナ様の持つ、その剣を使うだけです」

「え？ 『セントクルセイダーズ』を？」

「はい。たしかその剣には魔力伝導率の高いマルナライトが使われているはずです。その特性を活かせば、やれるはずです」

ナリアの言葉に、リイナは自らの腰にさした片刃の長剣を眺める。

このセントクルセイダーズはリイナの希望により、独特の刃の形状をしている。片刃と言つだけでも珍しく、それに加え剣身は薄く美しい。これはリイナが『叩き切るのではなく、斬り裂く剣を』と言う考えに沿つて作られたためである。

「」の剣に、そんな可能性があると語りうんですか？」

「あくまでも可能性ですが。剣身が薄く、とてもリイナ様の魔力に耐えられるとは思いません。ですが、だからこそそれを私が制御するのです」

自信をもってそう言うナリア。強い意思を持つた目でリイナを見つめるナリアは、どこか鬼気迫るものがあった。

そんな中、なかなか話に入れなかつたクーが声をあげる。

「んー。全く話が分からぬ、と言つたが全くついていけないんだけ
ど、結局クーは何をすればいいのかニヤ?」

「あっ、ごめんなさい。えっと、クーはあの高飛車な娘の注意を引いてもらいたいの」

「…つまり、化？」

גַּתְּתָה
בְּרִיתָה
בְּרִיתָה

「死——！」

ナリアの作戦を聞いて、自分に割り振られた位置の理不尽さに、悲

鳴にもとれる叫び声をあげるクー。

「でも、重要な役割よ？ 私たち一人に攻撃が飛んでこないようにしてもらいたいの」

「うー…。できるかどうか分からぬけど、やれるだけやって見る一ヤ」

拳を握りしめ、ナリアのお願いにやる気を見せるクー。

それを見たナリアは、リイナの方に向き直つて最後の言葉を発する。

「リイナ様。ご決断をお願いします」

「…分かりました。でも、ナリアさん。…死ぬ事だけは絶対に許さないので、そのつもりでお願いしますね？」

ナリアの意見を認めて、俯いていた顔をあげるリイナ。

その顔は悲しそうな色を残していたが、少しおどけてリイナがそう言つと、ナリアはどこか緊張していた顔を崩し、軽く笑みを溢した。

「ええ。あなたの事をレイソル様から頼まれてこるので。そう簡単に死ねませんよ」

「…ですか。なら、なおの事勝たないといけませんね…。じゃあ、行きますよ。リベンジです！」

「はい…」

「おー！」

小さく拳を掲げ、気合を入れて宣言するリイナ。その行動に、他の二人も一緒に手を掲げた。

リベンジへ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

「しくじりましたわ……」

ずれた眼鏡を直しながら、ソリアナは自らの魔法で吹き飛ばした三人の行方を捜していた。

本来、戦つた相手の死体等を見つけておかないと後々の作戦に支障が出る。例えば、殺したと思った相手からの思わぬ反撃など、絶対に食らいたくは無いからだ。そして、その相手が自分にとつて苦手な戦法を取る場合は尚更である。

「ブレイク・ピラーの一重人格も先ほどの爆発から見えておりませんし…まあ、あのような下賤な輩が死んだ所で私には関係ないのですが…」

ソリアナが言つてるのは、ちょうど三人を吹き飛ばした辺りに起きた、炎魔法と氷魔法のぶつかり合いの事だ。

その余波はソリアナのいる所まで届いており、特にその後に起きた冷気の突風は凄まじいものだった。

咄嗟に同じ作戦を進行中であり、その作戦参謀であるブレイクの心配をしたソリアナであつたが、すぐさまブレイクがいけ好かない自分が嫌いな人間だと思い出した彼女は、心配を直ぐに放棄した。

ガラツ

「…ああ、もう…自分でやつたことと言いますが、ここまで歩き

「ぐぐなつてるとは思こませんわ！」

魔法に巻き込まれ最早廃墟以上になつた街を、ソリアナが危なつかしく歩く。

時々瓦礫に足を取られているからだらうか。ずれた眼鏡を直す暇も無く、ただ苛立ちを募らせながら歩いてくソリアナ。

「全く、鬱陶しい事この上な……見つけましたわ」

何回目になるか分からぬ愚痴を吐いつとした時、ようやくこちらに向かってくる三人を見つけたソリアナ。唇を吊り上げ、真っ直ぐ歩いてくる三人を好戦的な視線で見つめる。

その視線に気づいた三人は、当初の狙い通りにクーが前に出て、リイナとナリアがその影に重なるように後ろについた。

前とは違う布陣にソリアナは眉を少し顰めたが、すぐに挑発の為に口を開いた。

「…逃げなかつた事はお褒め致しますわ。ですが、何度向かつても無駄だと言つ事が分からぬのですか？」

「誰もあんたなんかに褒められて嬉しくないニヤー！」

その挑発に乗つた形になるのだろうか。クーが拳を振りかざしてソリアナへと突つ込んでいく。

だが、後ろに控えていた一人はクーの行動を無視して魔力を集中し始めていた。

「ふん！ 何度向かってきても同じだと嘗て」とを、教えてさしあげますわ！」

突つ込んでくるクーやその後ろにいる一人に向かって、『水の尖刃』^{ウォーターブレード}を展開して攻撃を行うソリアナ。

飛んでくる水の刃を、クーは作戦通りに後ろの一人に飛んでいかないように全てを打ち落としていく。獣人族らしく、素早い動きで飛び水の刃を落とす様は、まるで狩りをしているようだった。

その証拠に、かなりの重労働のはずがクーの口元は笑っていた。

「いえーい！ やつ！ 案外楽しそよ、これ…」

拳句の果てにはそのような言葉を口にしながら、楽しそうに水の刃をその拳や足を使って叩き落していくクー。

だが、その行動はもう一度ソリアナの逆鱗に触れることになった。

「…あ、あなた！ 一度ならず！ 一度までも私を侮辱いたしますの…？」

手をわなわなと震わせ、内から込み上げる怒りを抑えようとしているソリアナ。

「…いいですわ。あなたはこれで殺して差し上げます！ 『清き水の凶刃』！」

威勢よく言つた言葉を皮切りに、クーに飛来していた水の刃の形が

変わった。

これまであまり規定の形の無かつた水の刃が、明確な剣の形を持つてクーに襲い掛かる。その剣の形は細長く、今までのようには拳や足を使って叩き落す事は不可能なものになっていた。

「いたつ！ 避けるしかないじゃ……」ヤツ！

より鋭利になつた水の剣は、ほとんどクーしか狙わなくなつてしまつていた。

それもそのはず。ソリアナの目はクーにしか向けられていないし、この魔法は水の尖刃より制御が難しい技のため、集中が他に向いている暇が無いのだ。

だが、その事は後ろで魔力を練つていた一人にとっては好都合だった。

「いいですかリイナ様。自分の体に流れる魔力の流れを意識してください。それが出来れば、後は私が引き出します」

「自分の中にある魔力の流れ……」

リイナはナリアのアドバイス通りに、自らの魔力の流れを意識する。体に流れる血の巡りを意識するような行為で、かなりの集中力がいるものであった。

目を閉じ、呪詛のようにナリアの言葉を呴きながら集中するリイナ。その額には玉のような汗が浮かんでいた。

「…く…」

それはナリアも同じで、リイナの魔力の変化を少しでも早く捉えようとしているために、こちらもかなり集中しきつているようだつた。

「…流れ…魔力を…意識…。…っ！」

「リイナ様！ そのままだ、魔力を体の中に閉じ込めるようにして下さい！」

ブツブツと咳きながら魔力の流れを掴もうとしている、リイナは自らの体が粟立つを感じた。そして、その体から無色の淡い輝きが放たれ始める。

その事に気づいたナリアが、次の段階に移行する為にリイナに指示を飛ばす。自らも魔力を練り、魔法を発動させるナリア。

「…なら… い…そ… 『マジック・ブースト魔力増幅』…！」

リイナの体から溢れる淡い光を、ナリアは自らの魔力の流れと照らし合わせるために魔法を発動する。制御しきれずに不規則に揺れる魔力の波長を見極め、それを上書きするように補助魔法を発動させる。

だが、対象者の魔力をそこから強化するこの魔法は、リイナのような制御できずに魔法を暴発させるような者にとつてはかなり危険なものである。

なぜなら、魔力を底上げする事は魔力総量を一時的に上げると言つ事であり、ただでさえ暴発する危険性がある術者に魔法をかけるこ

とは被害を大きくさせる可能性があるからだ。

しかし、ナリアはあえてこの方法を選んだのだ。リイナの精神力と、運を信じて。

「くう…。体が、熱い…」

「リイナ様！ 耐えてください！」

内から溢れる魔力の大きさに、リイナは苦悶の表情を浮かべて膝をついてしまう。ナリアの補助魔法の効果もあってか、次第に強まる無色の光を見たナリアは励ましの声をリイナへとかける。

その声を意識の外で聞きながら、リイナは自らの体を駆け巡る力に向き合っていた。

「…大丈夫…大丈夫だから…。…これは、私が持つて生まれた力なんです。…だから…だから…！」

体を折り、自らの腕で体を支えるようにつづくまつたリイナは、溢れる魔力に語りかけるように呟く。

そして、顔を空に向けて叫んだ。

「…私の…私の言つ事を聞いてよーーー！」

カチッ

リイナが叫び声をあげた瞬間、何かがはまる音が一帯に響く。決して大きくはないが、不気味にも頭に響くような音に、残りの三人は

全ての動きを止めた。

それはまる音を体の中から聞いたリイナは、その音に不自然な違和感と不自然な納得感を覚えていた。

「…成功、したの…？」

「な、何なのニヤ？ あの変な音は！」

「…あははは！ な、何が起きたかは分かりませんが、何をしようが結局は同じ事。お仲間と一緒に死んでしまいなさい！」

音の違和感にナリアは不安げにリイナの魔力の制御の成功を疑い、クーは急に聞こえた音に驚いて尻尾を逆立てていた。

だが、その音が響いた後もソリアナはすぐに気を取り直して、盛大に笑い声を上げる。動搖こそすれ、しかしソリアナは短杖を持った右手を掲げてそう宣言する。

放されたのは、一度三人を吹き飛ばした水の奔流。今回はナリアの補助魔法は使われていない。そのため、まともに食らえば今度こそ命はないという水の大巻を、リイナは真っ直ぐに見ていた。

腰から、愛剣のセントクルセイダーズを抜きながら。

「…やあ…」

抜き打ち一閃。

短い気合と共に振り抜かれた剣は、かつてゴロツキを氣絶させたも

のよりも早く、何より剣身が淡く光っていた。

そして、剣から放たれた淡い光の剣閃は寸分違わず、リイナたちに迫る水の大巻を真一文字に切り裂いた。

「んなあ！ な、なんと言う事ですの！？ 私の『水の奔流』が眞ベイズ・トルナードつ一いつに……」

「…す、すゞいニヤ…」

「…これが、リイナ様の本当の魔法のお力…」

リイナから放たれた剣閃がいとも容易くソリアナの魔法を切り裂いた事に、三者は違つ言葉を口にしたが、皆一様に驚きを隠せなかつた。

ソリアナは自らの魔法が切り裂かれた事を、信じられないと言つた顔で見つめ、クーはその威力を見て感嘆の声を上げていた。

そして、その力を引き出す手伝いをしたナリアはリイナの魔力とその威力を見て、ただ呆然と呟く事しかできなかつた。

「…次は、あなたの番です！」

剣を中段に剣身を真横に寝かせて構えるリイナが、小さいがしつかりと聞こえる声音でソリアナを見つめる。

その視線を受けたソリアナは一瞬ひるむが、すぐに薄く笑つて意趣返しのよつと叫ぶ。

「つ、次ですって？ わ、私にはまだ手は『じやこ』ましてよ？ それに、あなたのような者が一人増えた所で何も替わりはしませんわ。なぜなら、そこの一人はもう役にはたたないからで『じやこ』ましてよ！」

「…何の事です？ クーさんはまだ元気だし、ナリアさんだつて…」

ソリアナの叫びを疑い、周囲にいるであらう仲間の事を確認するリイナの口がそこで止まる。

リイナが見たのは、これまで通り水の刃を迎撃するクーと、その後ろで蹲っているナリアだった。

「つ！ クーさん！ ナリアさん！」

突然の仲間の防戦の展開に、リイナは名前を呼びながら駆け寄ろうとする。だが、リイナ自身にも飛来した水の刃が、容赦なく襲ってきた。

飛来する水の刃を、剣身や剣閃で迎撃するリイナだったが、このままでは仲間を助けに向かうことも出来ず、唇を噛み締めるだけだった。

「…やはり私の敵ではありませんわね！ それにあの補助魔導師、あのようなボロボロの体で出てくるなど、何を考えていらつしゃるのかしり…」

水の刃を制御しながらだが、ソリアナは単純な疑問を口にする。

ソリアナはクーとナリアに対して水の尖刃を放つた。しかし、その

水の刃は一度たりとも一人に届いてはいないのだ。ソリアナにとつては非常に不本意だが、全てクーが叩き落してしまっているためである。

だが、すぐにナリアは体を押されて蹲つてしまつた。そして、それに気づいたクーが自分の後ろにナリアを隠し、今もなお水の刃を迎撃しているのである。

そのソリアナにとつては不可解な行動は、疑問となつてソリアナの口からこぼれたものだつたが、その言葉はリイナの逆鱗に触れるものだつた。

「はあ――!」

叫び声を上げ、一気に自分に迫る水の刃を叩き落とすリイナ。そして、ソリアナを睨みつけるようにリイナはその顔を向けて、剣を片手で肩に担ぐようにして構える。

その意図が掴めなかつたソリアナは、眉を若干顰めながらもさりに挑発の言葉を口にする。

「以外にやりますわね。ですが、なぜあの様な者たちの事を気にするのです？ あのように役になんてたたない者たちの事を。私には分かりませんわ…」

首をやれやれと言つた風に振り、眼鏡の位置を直すソリアナ。

そのリイナにとつては腹立たしい行動と言動は、意図してかどうか、リイナの珍しい行動を引き出した。

「…ほんと、そうですね。私にも分からないです」

構えていた剣を下ろし、俯き気味にそんな事を喋るリイナ。それを見たソリアナは、軽くリイナに向かって手を差し伸べながら近づいて行く。

「なら、あの様な者たちはほおつておいて、私と踊りません」とへ。

「いいですね。うん。それはとっても良い案だと思いますー。」

ガキインー！

リイナの愛剣と、ソリアナの短杖がぶつかって嫌な耳障りな音をあげる。

今までうつむき加減で剣を下ろしてしまっていたリイナからの思わず反撃に、ソリアナは軽い悲鳴をあげながらも応戦する。

「なー、何をなさりますのー？」

「決まっています。…これが私の、答えですー。」

「ちつー。」

上段、中段、下段、抜き打ちと様々な形に構え方を変えるハーキューリー流の剣技に、ソリアナは苦戦する。

第一、生粋の魔導師であるソリアナは、今よつな接近された戦い方はしない。詠唱時の集中や、きちんとその魔法の対象者を見ていいなければならぬいためである。

そして、ついには短杖を使った鍔迫り合いを演じてしまい、ソリアナは舌打ちをするしかなかった。

その鍔迫り合いを演じる中、リイナは気になっていた事を口にする。

自らを苛立たせる、ソリアナの考え方。

「…なぜ、あなたは人の考えを軽んじているんですか？」

「軽んじる？ 私にはただ分からぬだけですわ。下賤な下庶民の考え方など」

ソリアナが吐き捨てるように言つた言葉に、リイナは戦慄を覚えた。自分自身もハーキュリー家と言つ家に生まれ、王やそれに与する身分の高い者としてそれなりの待遇を受けてきた事はあったが、リイナはそれを決して傲る事はなかった。

むしろその対偶を嫌つてゐると言つてもよく、リイナ自身は親たちや使用人のいる本家のお屋敷には住んでいない。本家に程近い離れを使って鍛錬の日々を送つてゐるのである。

だからこそ、ソリアナのその態度や言動にリイナは戦慄を、怒りを覚えていた。

「…なぜ、そんな事が言えるんですか…。まさか、自分が特別な人間だなんて思つてはいないですよね…？」

自分の中に渦巻く苛立ちを押さえ込み、ギリギリとソリアナに向け

て力を込めていた剣を引くリイナ。

目の前にあつた刃が引かれた事に、ソリアナは内心安堵しながらも氣丈に振る舞う。

剣を引いて呻くように尋ねるリイナに、ソリアナは自分の素直な思いを口にする。

「？ 別に私は自分が特別な人間だとは思ってはいませんわ。ただ、選ばれた人間であるという自覚はありますけれど」

「選ばれた人間？ どういう事ですか？」

「簡単な事ですわ。私はただ帝国の王、クルト王に選ばれてここにいるのですわ。それが選ばれた人間という証拠でしてよ？」

「そうですか。なら、あなたは私が一番嫌いなタイプの人ですね」

「え？ 何を…」

おっしゃっているの？とは続けられなかつた。リイナがソリアナに向かつて再び突進してきたためだ。

突進してきたリイナを、ソリアナは横に転がる事で避ける。彼女自身にとつては無様極まりない行為だつたが、最大限に伸ばされた剣の切つ先を避けるにはそうするしかなかつたであろう。

渾身の突進を避けられたりイナは、足を思いつきり地面に突き刺すようにして強制的に方向を変える。

そして、剣を大上段に構え、思いつきり振りかぶった形をとった。

「…あなたみたいな人は…！…潰れて、下さい…！…『プレッシ
ヤー・ブレード』…！」

大上段に構えた剣から、リイナの叫びと共に眩い光が輝く。無色の
輝く光は、リイナの剣を中心に爆発的にその輝きを強める。

そして、リイナはその輝く剣を一気にソリアナへと振り下ろした。

「な…？　」「この魔力量は…！　キャアーーーー！」

目の前に迫る膨大な魔力の奔流に、ソリアナはただ呟く事しかでき
ずにその奔流に巻き込まれて悲鳴をあげた。

勝利へ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

不可思議（前書き）

…感想どじどじ待つてマース…

不可思議

「…す、すゞいーヤ…」

クーは、田の前で起じた滅多な事では見ることができない現状に目を白黒させていた。

クーの田の前、つまりリイナが技を放った後には、大きなクレーターが穿たれていた。その中心には、地面に軽くめり込む形で瓦礫と共に埋まるソリアナの姿があった。

「はあ…はあ…はあ…」

一気にかなりの魔力を放出したため、リイナは初めての虚無感に襲われていた。

体力の消耗とはまた違つ苦しさに膝に手をつき、荒い息を吐いていく。

そんなリイナに、近づいて来ていた二人分の手が肩にそつと置かれた。

「はあ…はあ…。…クーさん、ナリアさんも…。…無事で良か…」

ドサッ

「うわあ！ リ、リイナ、大丈夫かーヤー！？」

力尽きたように崩れ落ちたリイナに、体中に切り傷を作ったクーが慌てて支える。

しかし、突然リイナが倒れた事にクーはひどく慌ててしまつて、ただリイナの体を支える事しかできなかつた。だが、その後ろから、クーやリイナよりひどい怪我をおつたナリアが、クーを落ち着かせるために口を開く。

「…大丈夫。急激な魔力の流れに、体がついていけなくなつただけでしょう。眠つていいだけですよ。それより、早く横にさせてあげなければ…」

「あ、それもそうだニヤ。それじゃあ…あそこで」

崩れた瓦礫の中に、ちょうど良い大きさの空間を見つけたクーは、そこにリイナをナリアの指示通り寝かせる。

その行動を見届けた後、ナリアは自分とクーに『ペイン・ブロッカ痛覚遮断』をかける。

自らの体を巡る淡い白色の光を、クーが面白そうに見ているとリイナが大技を放つた地点から突然音が聞こえてきた。

「…よ、よくもやつてくれましたわね…！…このソリアナ・レッドフィールド、一生の不覚ですわ！」

怨嗟の声を漏らしながら、崩れ去つた瓦礫の中から現れたのは髪や服、身に附いている物すべてをボロボロにしたソリアナだった。

リイナの魔力によってできた軽いクレーターの中心から這い上がりくる姿は、その身なりと相まって恐怖を覚えさせるものだった。

「な、なに？ まだやる気なのかニヤ？」

血走った目で見つめられたクーは、その後ろで倒れて眠るリイナと、それを見守るナリアを守るために再び拳を構える。

それを見たソリアナは、獰猛な笑みを浮かべてボロボロの体でぎこちなくその手を動かす。

その姿は、リイナを怒らせる事になつた自分の分からぬ姿と同じであつたが、今のソリアナにはそんな事は分からなかつた。

「…ククク…。殺して差し上げますわ！ 私の最大の魔法、『水神の…！』

ザクッ

「つー」

「ぐはつー」

獰猛な笑みを崩さぬまま、クーに向かつて自らの怒りのままに魔法を放たんとしていたソリアナの体から、漆黒の大剣が生えた。

ソリアナの身の丈をゆうに越えるであろう漆黒の大剣を、ソリアナは信じられないと言つた顔で見つめる。クーは急に自らの敵の体を貫いた大剣の出現に、ただただ驚く事しかできなかつた。

「……な、なぜ……私が……がふつ……」

それだけを口にし、ソリアナは口から大量の血を吐きながら地面へと倒れる。

その時クーは、倒れていくソリアナの後ろにいた人影を見た。

真っ黒なロープを着込み、異質としか言いようの無い雰囲気を醸し出す人影を。

「……はつ！　ま、待つニヤ……！」

その異質な雰囲気に飲まれていたクーだが、気を持ち直して追いかけようとしていると、その人影はソリアナの体に刺さった大剣を引き抜いた後、影に溶け込むようにして消えて行ってしまった。

その事にクーは悔しそうな顔をしたが、すぐに倒れたソリアナやリナ達のいる場所へと踵を返した。

「あ、クー。どうしたの？　さっき物音がそちらから聞こえてきたのだけれど……」

暗い表情でこちらに戻ってきたクーに、ナリアは心配そうに状況の説明を求める。

「……ソリアナが死んだ。真っ黒な大きな剣に後ろから貫かれて」

「え？　そ、その剣はどこに？」

「変な雰囲気の奴が持つていったニヤ。それに、ロープを着込んで

たから顔とかまでは分からなかつたよ。でも、体の感じからしてみたら、男で間違いないとは思う」

「そう、ですか…。なら、その男は一番気をつけなければならぬ相手のようね…」

顎に手を当て、真剣な表情で考えるナリア。しかし、すぐにそのしかめつ面を止めてクーに提案を持ちかける。

「ねえ、クー。このままリイナ様と共に王様の護衛に向かいましょう。もちろん、リイナ様が起きてからだけれどね」

「王様の護衛？ どういう事ニーヤ？」

「そのような男がいるのなら、シリアナ王にも知らせておかないといけないし、それにその方が帰つて安全だと思つの」

「んー。でも、クーにはあんまり…。あ！ それならシオン達のところに戻ればいいにニヤー。シオンにシリアナの事も聞けるし、もしかしたらコフфиー やカナがその男の事も知つてるかも…」

ナリアの意見に終始考へてゐる様子だったクーが、これは名案だとばかりに手を叩きながらナリアに話を持ちかける。

だが、そのナリアはと言つて、知らない人の名前が何人も出てきた事に眉を顰めていた。

「クー？ その人達は誰なの？」

「仲間ニーヤー。最近知り合つたんだけど、それでも仲間ニーヤ。みん

ないい人だよ」

誇らしげに胸を張つてナリアの質問にそつ答えるクー。

そんな精一杯体を大きく見せようとするクーを見て、ナリアは苦笑と共にクーの意見を受け入れた。

「ふふ。分かったわ、クー。情報は大事だし、その者達はリイナ様の事も知つてゐるのしよう? なら、クーの意見に従うのは当然ね。でも、できれば皆の事を見ていたいのだけど…」

そつこつナリアの表情には、暗い影がさしていった。

心の内では次に何をすればいいのかは分かっているのだが、やはり倒れた仲間の事が気にかかるのだろう。

今となつてはビビりにいるのかも分からなくなつた仲間の事を思つて、遠い目を死ながらクーを見ていた。

「…「う…ナリア、さん?」

クーがナリアの言葉に言葉をつまらせていると、リイナが呻き声をあげながらだが目を覚まして体を起しやうとしていた。

その行動を見たナリアとクーは、いち早くリイナの元に駆けつけ、その体を支える。

「あ、ありがとうございます…ナリアさん、クーさん…」

「リイナ! まだ寝てないとダメだにゃ…」

「クーの言つ通りです！ あなたはまだ魔力の放出に慣れていないのですから、あまり」無理をなさらないで下さい」

支えてもらつたことに感謝するリイナだが、その支えた張本人である一人は口々に不満と叱咤の声をあげる。

だが、リイナは心配する一人に対し、手を差し出して笑いかけた。

「えへへ…。私なら、大丈夫ですよ。それより、早く皆の所に戻つて話をしないと…」

「皆？ ああ、シオンとか言つ人達の所ですね」

「え？ どうしてナリアさんが知つて…」

「それならクーが教えたのニヤ」

えつへんとでも言つよつに胸を張つてリイナの疑問に答えるクー。

「そりなんですか？ でも、それなら話は早いです。シオンさんは帝国内部の情勢にある程度詳しいようですし、コフイーさんは私の魔力についても分かるはずです」

「コフイー？ と言つと、あの有名な召喚魔導師、コフェルニカ・シーファスの事ですか？」

「はい。兄様の紹介で出会つたんです！」

力強く、兄様と言つ単語を強調しながら嬉しそうに答えるリイナ。

その嬉しそうなリイナを見て、ナリアは今はどこにいるのかも分からぬ騎士団団長殿を思い浮かべてため息を吐いた。

「レイソル様が……しかし、あの方の交友関係は計り兼ねる所がありますね。あの変人と言われる召喚師に顔が利くのですから……」

「んー。ほんとに一回リイナのお兄ちゃんに会つてみたいものだいやー」

ナリアがため息を吐くとほぼ同時に、クーも違う意味のため息を吐く。

だが、すぐにため息を吐きたくなるような気分押さえ込み、話を元へと戻すナリア。

「……えー、それでは、その私にとっては協力者と言つ形ですが、その者達の所へ戻ると言つ事でよろしいですか?」

「クーはそれでいいーヤ。でも、ナリアは……」

先ほどのナリアの気持ちを知つてゐるからだろう。ナリアを心配そうに見つめるクー。

だが、ナリアはそんなクーに対して薄く笑いながらこう言つた。

「構わないわよ。こんな所で私情を勇戦させる訳にもいかないし、残りの近衛隊の面々を探してこの事を伝えていかないと……」

「そう、なのがニヤ」

「ええ、 そういひ事なの」

再度、心配そうなクーに笑いかけるナリア。

自分にとつても、それが一番だと言い聞かせるより、しつかりと。

その決意にも似た声を聞き、クーはもう何も言わなかつた。

一人の一連のやり取りに、リイナは置いてけぼりになつてしまつて、いたが、話が終わつた事を確認すると、行動を開始するために声をあげた。

「なら、シオンさん達の所に戻りましょう。あつちで良かつたですよね？」

威勢良く、シオン達と別れた方向とは真逆の方向を指差すリイナ。

「リイナ、そつちはお城の方だニヤ。なんでもう一回お城に行かないといけないのニヤ？」

「ふふ。さすがリイナ様ですね」

「ええ！？ だつて、あつちから流されて、それでいてこつちに歩いてきたんですから…」

「あつちやこつちって言つたつて分からぬニヤ」

ぐるぐるといろんな方向を指差しながら、何とか一人に笑われないように方向を定めようとするリイナ。

だが、毎回指を差す度に差す方向が変わるのが見て、ナリアは笑い、
クーは呆れる事しかできなかつた。

「あ、なう」ひちですね！」

「わつちはお城だつて言つてる」「ヤー。」

「ええ……」

「ふふふ。楽しいですね、本当に……」

不可思議（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

新たな決意

「…フォーゲルノート帝国は、エスカレルニア王国に戦争布告します」

無情にも、トラガアスが発したその言葉は、シオンがむつとも聞きたくない言葉だった。

「そ、そんな！ くそつ！」

ドスツ

その言葉にシオンは膝を折り、崩れてしまつ。そして、血の認識のせに苛立ち、地面をその拳で殴りつける。

「…僕は、いつたい何のために…？」

「ちょっとシオン！ セツヤツト下を向くのは止めたんでしょう？」

「カナ…」

下を向れ、自分のしてきた事が本当に正しかったのか悩むシオンに、カナが叱責の言葉をかける。

「ぐじぐじ悩む必要なんて無いじゃない！ 私もいるし、コフイーちゃんやリイナちゃん、クーサちゃんもいるのー セツツツツ時ぐらー、仲間に頼りなれこよー！」

「……でも……」

「つーでもじやなーい！」

ドガッ

カナの言葉に、シオンがまだ下を向くことに苛立つたのか、思いつきリションを殴り飛ばすカナ。

「な！ 貴様！ シオン殿下になんて事を…」

「うぬうそこ！ あんたは黙つて…」

「なつ…」

今まで口を出さなかつたトラヴァスだったが、かつての主 今
でも彼の中でもシオンは守るべき対象であるが を殴り飛ばさ
れた事にたまらず顔をあげる。

だが、そんな事を気にするカナではない。

トラヴァスを一切見ることもなく声を上げ、強制的に黙らせる。

「ああもつまつたく！ 諦めるのはまだ早いつて言つてるの！ ロ
フィーちゃんにも言つたんでしょう？ お父さんを止めたいつて！」

「…うん。確かに言つた」

「なら諦めない！ せつかくの期待を、態々裏切る必要なんか無い
でしょ？」

「…うん。 ありがとう、 カナ」

「礼なんかいらないわよ。 そんな事より、 今はこの状況を何とかしないといけないんだけどね」

そう言つてトラヴァースの方に体を向け直し、 自らの愛槍『レストーシヨン』を構え直すカナ。

シオンも体を起こし、 カナの隣にゆっくりと並ぶ。

そして、 トラヴァースに対し口を開いた。

「…トラヴァース。 一応聞くけど、 父上は本当に宣戦布告をしたんだね？ それに、 その宣戦布告をエスカレルニア王は受けたの？」

「はい。 確かにクルト王は宣戦布告をなさりました。 受け取ったかどうかは私には分かり兼ねますが、 武王と呼ばれる方です。 受けない訳がないでしょう」

シオンのゆっくりとした質問に、 トラヴァースもそれに合わせるようによくくつと答える。

今のエスカレルニア王、 シリアナ・フィールダーは、 豪胆で好戦的な性格で知られている。

自ら率先して武芸を学び、 それを誇りに思つてゐる。 周りの忠臣達が止めても止まらない、 そんな王である。

だからこそ、 トラヴァースはそう答えた。 宣戦布告などと言つ、 普通

では考へられないような単語をも受け止め、それに答えてくれるであろう、と。

「そつか…。でも、僕は抗うよ。抗つて抗つて、その先に何があつても、必ず父上を止める。そのために帝国を出たんだから」

「ですが、あなた一人の力で何ができるのですか！　もう戦乱は始まりを告げ、王国側がこのまま黙つていい訳がありません！」

シオンのはつきとした決意に、トラヴァースはありえないと言つた声をあげる。

トラヴァースの言つ通り、ここまで王の住まうクルメニアの街を焼かれては、誰もが怒りを覚え、帝国を恨む。

あの者たちにも同じ面對合わせてやる、と。

それが分かつてゐるトラヴァースは、当初はこの作戦には猛反対していた。だが、ブレイク以下の参謀たちに押し切られ、今この場所にいるのだ。

そんな事をまったく知らないカナは当然とばかりに非難の声をあげる。

「ちょっと…。その戦乱の始まりにはあんたも加担してゐんでしょうが！　今この場所にいることがなによりの証拠よ…」

「俺も初めは反対したさ…。でも、ブレイクや帝国直属の親衛隊の者たちがそれを阻んだ！　我らと違う考え方を持つ者が怖くはないのかと！」

「つー」

トラヴァースの叫びに含まれていた聞き逃す事の出来ない言葉にて、一人は息を呑んだ。

そして、シオンは懲る懲るその言葉の真意を確かめるために、トラヴァースにこう言った。

「…トラヴァース、まさかとは思つけど…それってルナニスクルメアと詛の組織が絡んでる?」

「その通りです。前々から兆候はあつたのですが、止められませんでした。やはり、ただの騎士団所属の俺なんかには…！」

怒りや自分のやるせなさからか、敬語を忘れて話し方がぐちやぐちやになってしまっているが、この際シオンもカナもトラヴァースも、その事にはまったく構わなかつた。

「な！ 兆候はあつたってどうこいつ事？ まさか、シオンが帝国を出た辺りからじゃないでしょうね？」

「…その通りだ。シオン殿下が帝国から出奔なされた頃から、あいつらの活動は活発化している。王宮前の広場で大々的に演説をするなんて事もあつた」

「王宮前の広場を使うなんて、普通じゃ絶対に出来ない…。なら、やっぱり父上や他の者が手を回しているの？」

「俺には分かり兼ねますが…。ただ、これだけは言えます。フォー

ゲルノートの民や王宮に使える者、ほとんどの者がルナースクルメアの信者になっています。ですので、今帝国に向かうのはほぼ不可能…いえ、無謀かと」

トライヴァースのその発言に、今まで勢いづいていたカナも押し黙つてしまつ。

だが、シオンだけはその発言に對して冷静だった。

「…その通りだらうね。ルナースクルメアの奴等は僕の力、いや、この『時の証』^{エヴァイデンスクロック}を狙つてゐる。父上もこれを狙つていたからね」

そう言いながら、服の下に仕舞つていたあまり装飾のなされていな
い十字架を取り出す。

そして、服の中から取り出した時の証を手に、トライヴァースへと向ける。

「君も、これが當てなんだらう?」

「いえ、断じて違います! 確かに俺はその時の証以下、あなたの身柄を帝国へと連れ帰れと命ぜられました。しかし! この様な惨事を目の当たりにして、俺にはそんな事が大事だと思えないんです!」

頭を振り、分からぬと言つように顔を手で隠してしまつトライヴァース。

「ふんつ! どうだか!? 結局この場に来ているあなたの事なんて誰が信じるものですか!」

カナはそんなトラヴァースに対し、辛辣な言葉を投げかける。

元々勝氣で元気が取り柄の彼女にとって、先ほどの戦闘などの不完全燃焼になつてしまふ事は嫌いである。

そのため、トラヴァースの態度や、なかなか本気にならずに、基本的に手加減して矢を射るだけのトラヴァースの戦い方が単純に気にくわないのでだ。

鼻を鳴らし、腕を組んでそっぽを向いてしまうカナに、シオンはただ苦笑するしかなく、言いよつに言われたトラヴァースも無言を貫いていた。

「ははは…。ひどい言われようだね、トラヴァース」

「仕方あつませんよ。…結局俺は、何をすればいいのか、何を信じていけばいいのか、もう分からんですから」

肩を竦め、やれやれと言つた風に首を振るトラヴァース。

だが、すぐに真面目な表情に戻つてシオンに向き直る。

「ですがシオン様。これからどうなされるおつもりですか？ 王国の王家関係者の者にはあなたの顔は知られています。今からあなたがシリアナ王の所に向かつても…」

「無駄、ではないよ、トラヴァース。顔を知られていると言つても、あれはもう何年も前の話。何とかなるさ」

トライヴァスの懸念をよそに、その言葉を継ぎながらシオンが安心させるように笑いながら語る。

「ですが……！」

「……僕には、仲間がいるんだ。」ことは他に、ブレイクを止めてに言つてくれたコフфиー。城に状況把握のために向かつているリイナとクー。そして、ちょっと不機嫌だけど、カナがいる」

「ちょっとー、急にそんな事言わないでよねー、それに、ちょっとじやなくてけつこつ不機嫌！」

顔をほほシオン達とは反対方向に向けていたカナだったが、急に話の中に自分の名前が出てきた事に広義の声をあげてシオンに掴みかかる。

「わあー、『めんつてばー、かつこつかないでしょーー？』

「わハハ…」

掴まれやうになつたシオンは、伸ばされるカナの手を何とか避けながら謝る。

結局、掴もつとしていた手を避けられてしまつたカナは、頬を膨らませて黙つてしまつた。

「……ふう。……だからや、なんとかなるよ。全部は無理でも、一緒に協力し合えば何かが出来る。これが本当にそんな力を持って、本当に世を乱すような物だとしたら、僕が必ずこれを壊す」

時の証を握り締め、そう決意を新たにするシオン。

トライヴァースは、シオンの目に込められた決意に、これまでのよつこ
反論も出来ずにただ呆然とするしかなかつた。

「… そう、ですか。なら、俺は引くしかありませんね」

「やうよやうよ！ あんたなんか卑くどつか行つちゃいなさい！」

これ幸いとばかりに、今まで黙つていたカナが急に声をあげる。

手をあげてぶんぶんと振り、舌を出して追い返そうとする様は、何
といふか 子供だった。

そんな仲間の思わぬ態度に、シオンは改めて呆れ返るしかなかつた。

新たな決意（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

「では、シオン様。俺はこのまま帝国に戻りつと思こます」

「いいの？ 確か、ブレイクも親衛隊も来ているんだり？ 彼らの元に戻つて、それからじや……」

「いえ、いいんです。元々俺はあいつが嫌いですし、騎士団が親衛隊に混ざるのは後々面倒なもので……」

「そつか。君らしいね」

「では、これで」

「うん。戦場で会わない事を、祈つてるよ」

最後にそつ言葉を交わすと、トラヴァスは兵達を連れて南に、つまりフォーゲルノート帝国に向かつて歩き出して行つた。

「べーつだ！」

「カナ…。やめなよ、そんな事。みつともない」

去つていくトラヴァスに対し、カナは思いつきり敵意を表していた。

舌を出し、これでもかとしぐらに身を乗り出して嫌いだと呟き、雰囲気を全面に押し出していた。

そんなカナの行動に、シオンは呆れながらカナをたしなめる。

すると、カナは頬を膨らませながらシオンに食つてかかつた。

「何よシオン。私はあいつが嫌いなの。何したつていいじゃない」

「いやいやいや、そういう問題じゃなくてさ。僕はみつともないつて言つたんだ。もう子供じやないんだからせ」

「むりう…。分かつたわよ…」

シオンに諭される形で、カナはトラヴァスに向けた挑発紛いの行動を止め、シオンの隣に立つ。

そこからは一人共無言になり、焼け焦げた街を眺めていた。

だが、おもむろにカナがこう切り出した。

「…ねえ、シオン。なんか寒くない？」

体を微妙に震わせ、腕をさするカナ。

だが、シオンはカナとは違い、まったくその気温の変化に気づいていないようで平然としていた。

「ん？ 寒いだつて？ 周りがこんなに荒れ果てて、しかもその原因が炎の魔力だつたら寒くなるはずが…」

ヒュオオオオ……

「うう…」

突然、吹雪が起きたかのような冷気が、二人に降り掛かる。

元々、寒そうに自分の腕をさすっていたカナは、その冷気に当たられて小さくなってしまった。

シオンはと言うと、突如降り掛かってきた冷気に顔をしかめながらも、カナほど寒そうにはしていなかつた。

それもそのはず。その理由は、シオンは少し大きめコートのようなものを羽織り、ズボンはスラッシュしながらもぴつちりとしたズボンを着ている。

それに対しカナは、少々露出の大きい胸元の開いた服を着ており、下はあまり開かれていないが真っ直ぐなスカートだ。

これでは、両者の反応の違いが大きい事がよく分かつてしまつ。

シオンも寒いとは思つてゐるのだろうが、如何せんカナが余計に寒がつてゐるために、カナから見たら暖かそうな服装の自分が寒がつてはいけないと思つてゐるのである(?)。

「さ、寒い…。な、なんですよ…。こんな、急に…」

体を一生懸命さすりながら、突然降り掛けってきた冷気に怨み言を漏らすカナ。

そんなカナを見兼ねたシオンが、手の平に炎の魔力を集中させながら

ら呪文を唱える。

「えーっと…。炎よ。我が魔力を糧とし我が前に灯れ。『灯火ノ焰』ヒート・フレイム

L

ボウツ

シボンの差し出した手の平に、小さな炎が灯る。

自分の手の平の上でゆらゆらと揺れる灯火を見て、シオンは笑いながらその手をカナに差し出した。

「ほり。低級魔法だからそんなに熱くはないし、これなら暖まるると思うよ。あ、でも、一応曲がりなりにも攻撃魔法でし

かないから

「ちよ、頂戴！」

カナにはそう見える
にカナ
差し出された絶好の断熱機
は喜び勇んで飛びつく。

そして、シオンが注意を促そうとしていた矢先に、それを無視して
その小さな炎をむんずと掴んだ。

「無理に掴むと火傷する、よ……？」

「あつ――――――て、手が焦げる――――――。」

案の定、炎の魔法を握り潰した力ナは、シオンの呆然とした台詞を

尻目にただ走り回っている。

手を振つて一生懸命手を冷やそうとしたり、冷気が流れ込んできた方向に向けて手を突き出したりと、様々な方法で半分火

傷したような形の手を冷やしていた。

「…カナ…。自業自得だよね、これは…？」

「ううー…。手がヒリヒリするよー」

泣きそうな声で手を前に突き出して叫ぶカナの姿は、かなり滑稽だった。

シオンはその姿を見て完全に呆れ返つてしまつていたが、カナが手を突き出す先から聞こえてきた微かな物音に、咄嗟に耳を済ませる。

カナもその音に気づき、未だに手を突き出したままだが、目を細めていつでも動けるような体勢になつていた。

だが、その物音の先から現れたのは魔物でも帝国の追手でもなく、シオンたちが待つ仲間の一人だった。

「…あなた達、何をしているのかしら？」

戻ってきたコフィーには、正直な所二人の行動が理解出来なかつた。

自分に向かつて突き出された手に、その後ろでそれを眺める少年。

はつかりついで、何かの勘かと疑つてしまひの部分がある。

「 ウ、ゴフイーちゃん…。…お、おかえり」

「 …ただいま?」

手を突き出したまま、そして何かに怯えるようにカナガの言葉を発する。

その言葉に、ゴフイーはただ困惑してその言葉に対する言葉を返すしかなかつた。

合流へ（後書き）

誤字脱字、変な改行あれば指摘お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2270v/>

アクレニア戦記

2011年9月10日12時36分発行